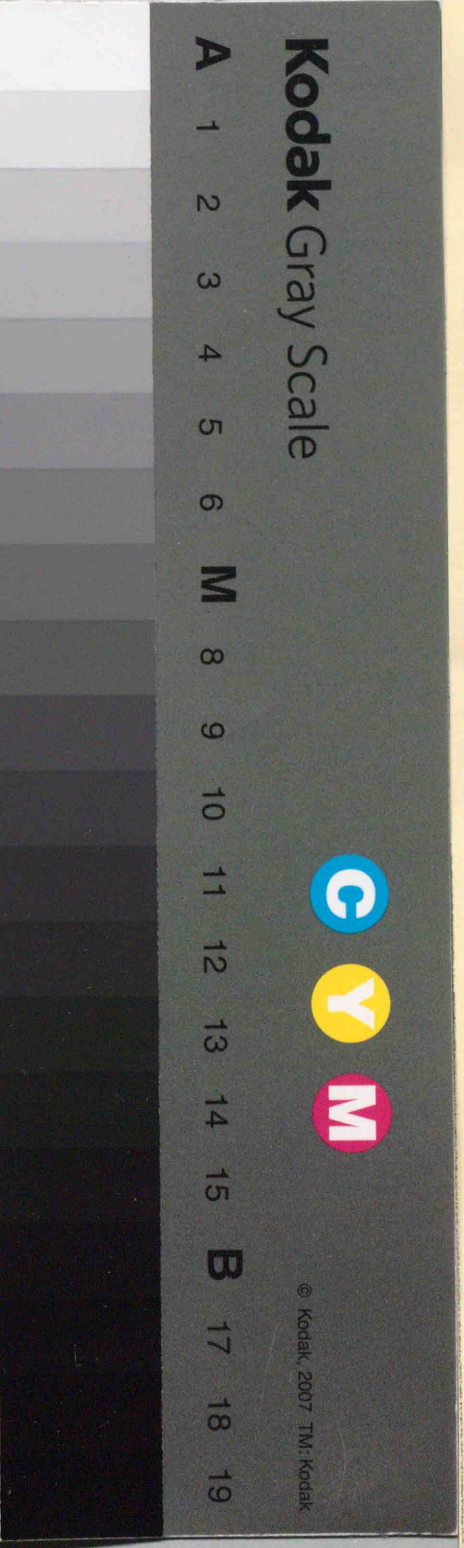
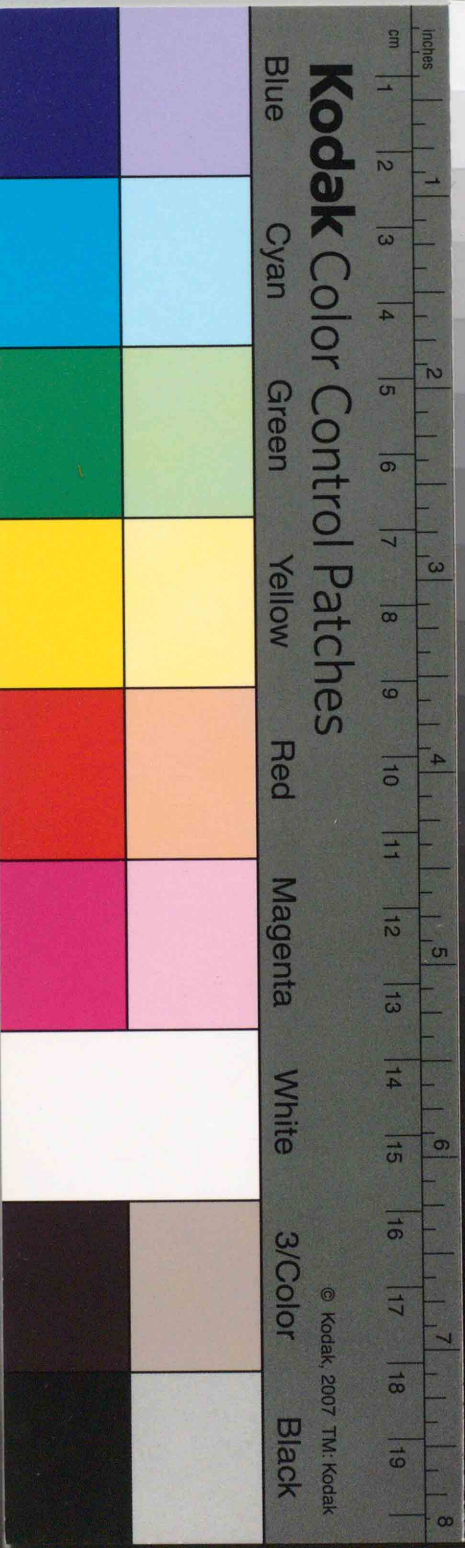
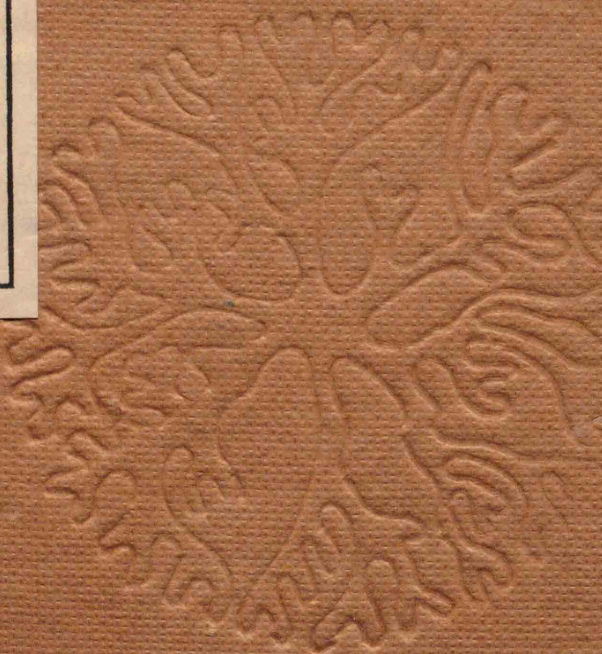


訂改
帝國讀本

卷二

3759
Ha7
資料室



41712

教科書文庫

4
810
41-1918
200030 2049

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

日六十月二十年七正六
濟定檢省部文

文學博士芳賀矢一編

訂改



帝國讀本

東京

合資
會社

富山房發兌



訂改 帝國讀本卷二目次

- 一 星と花 (韻文)……………一
- 二 聖徳太子 (口語文)……………二
- 三 類似せる東西の諺……………六
- 四 秋の夜……………一〇
- 五 山語 (口語文)……………三
- 六 藤樹先生……………一六
- 七 汽車の旅 (三) (口語文)……………三
- 八 大阪 (口語文)……………一六
- 九 セシル・ローツ (口語文)……………一四

目次

一〇 倫敦便(書簡文)……………四〇

一一 洒落と機智……………四〇

一二 武士は相身互(口語文)……………四六

一三 熊本城(口語文)……………五二

一四 死して惜しまるゝ人となれ……………五九

一五 大石良雄 其の一……………六六

一六 大石良雄 其の二……………七三

一七 復讐を報ず(書簡文)……………七九

一八 新年(口語文)……………八二

一九 伊勢神宮(口語文)……………八六

二〇 大海原の歌(韻文)……………八九

二一 極地の探検 其の一……………九二

二二 極地の探検 其の二……………九八

二三 眞の勇氣……………一〇六

二四 伊能忠敬の晩學 其の一……………一〇

二五 伊能忠敬の晩學 其の二……………一四

二六 朝鮮雜觀 其の一(口語文)……………一八

二七 朝鮮雜觀 其の二(口語文)……………二四

二八 八道の山(韻文)……………三二

二九 峠の茶屋(口語文)……………三三

三〇 安宅……………四〇

三一 閉塞隊の出發に臨みて別を兄に告ぐ(書簡文)……………四七

三二 最後の授業 其の一(口語文)……………五〇

三三 最後の授業 其の二(口語文)……………五五

- 三 皇室と國民……………一五九
- 三 國を祝ふ歌(韻文)……………一六三

自讀文

- 一 最も偉大なる豪傑(口語文)……………一七〇
- 二 比叡山上の眺望……………一七二
- 三 兎 狩(口語文)……………一七四
- 四 スパルタ武士……………一七七
- 五 勇士の行く手(韻文)……………一八〇
- 六 其の夜の黒木本營(口語文)……………一八三
- 七 君が代の歌(口語文)……………一八六

卷二 目次終



改訂帝國讀本卷二

自然の御母

一 星と花

土井 晚翠

同じ自然の御母の

御手にそだちし姉妹、

み空の花を星といひ、

我が世の星を花といふ。

かれとこれとに隔れど、

にほひは同じ星と花。

笑と光をか
はす

笑と光を宵々に
かはすもやさし、花と星。

さればあけぼの雲白く、

み空の花のしぼむとき、

見よ白露のひとしづく

我が世の星に涙あり。

— 天地有情 —

二 聖徳太子

萩野由之

政治家としては新に大陸文明を輸入して大化改
新の基を作り、宗教家としては、佛教を奨励して各宗
から太子様と尊ばれ、法律家としては、成文法の始と

成文法

いはれる十七條の憲法を制定し、而して又工藝家か
らは其の技術の開祖の如く尊敬せられ、あらゆる方

面に其の道々の
元祖の如く仰が
れるのは、厩戸皇
子である。

皇子は、用明天
皇の御子で、推古
天皇の御時に皇



聖徳太子七歳木像 (寶國)

(一)用明天皇の長
子。推古天皇
の二十九年
(一八二)癸
年四十九。

(二)第三十一代。

(三)第三十三代。

太子として攝政をなされ、天皇を輔佐し奉つて、政治
上、宗教上、工藝上、文學上、種々偉大な功績を残された

二 聖徳太子

天資

お方であるが、御幼少の時から非凡な天資は、顯れていらせられた。皇子御幼年の時、或日父の皇子即ち後の用明天皇は、王妃とともに皇子を伴なうて、宮中の御庭に今を盛と咲いてゐる桃の花を御覽なされたことがあつた。其の時、父君は御子の智慧を試して見ようと思し召されて、

「そなたは此の桃の花の紅を美しいと思ひますか、又は此の松の葉の緑を美しいと思ひますか。」とお尋ねになつた。すると皇子は、

「桃の花は美しうございますが、夫は只一時の事です。松の緑は四季に色が變りませんから、私は此の

即座に

桃の花よりはあの松の色を愛します。」

と即座にお答へ遊ばされたから、さすがの父君も大いに驚いて、一層御寵愛遊ばされた。

故障を排す

此のお答は、幼年の御方としては珍しいお考であるが、成長の後に諸の政治上の改革に就いては、いろいろの障碍も起つたであらうに、いつもそれに打勝つて事をなし遂げられた其の勇氣と志操とは、此の松の緑の四季に其の色が變らず、霜や雪の故障を排して常磐木の操を立てるのと相似てゐるでは無いか。桃の花の様に、一時にはつと美しう派手な事をしても、末の遂げぬ時には、大改革も大事業も成功する

ものでは無い。桃と松の答は吾人の好い教訓である。又或時皇子は他の諸皇子と一緒に、お庭先で遊んでいらせられたが、何かの事の間違から、激しく口論に及んで、大分騒々しくなつた。これを聞かせられた父君は、懲しめの爲にとあつて、鞭を取つて御縁先までお出でになつた。

すると他の方々は、皆鞭にうたれるのが恐ろしさに、我先にと逃げかくれられたが、只此の皇子だけは少しも逃げかくれられぬのみか、父君の御前に出て、平身低頭していらせられた。そこで父君は怪しみな

平身低頭

「そなたはなぜ逃げぬのか。」

とお尋ねになると、皇子は恭しく一禮して、

「逃げました所で、天へも昇られず、地の中へもはいられませぬ。それよりは正直にお鞭を受けたいと思ひまして、こゝに居るのでございます。」

と申し上げられたので、父君は却つて、皇子の正直をお褒めになつたといふことである。

此の正直の心がけが、四季變らぬ松の緑のやうに、皇子一生の本領となつて、いつも御事蹟にあらはれてゐる。それ故、皇子のお定めになつた十七條の憲法の中にも、正直といふこと、平和といふことなどが重

天へも昇られず、地の中へもはいられず

本領

光彩を放つ

に諭されてある。平和は正直から起るので、正直はまた成功の基であるからである。皇子の御事業は種々の方面に光彩を放つてゐるが、かゝる大人物の幼時には、かくの如き事があつたのである。大人物となるには、幼少からの修養が最も大切である。

—讀史の趣味—

三 類似せる東西の諺

花より團子。 麵包は鳥の聲よりよし。
馬子にも衣裳。 美しき羽毛は美しき鳥
を作る。

猫に鱧節。

狼が羊の番。

苦しい時の神頼。

病室は信心の寺。

かはゆい子に旅をさせよ。

鞭を惜しめば子を害ふ。

馬鹿につける薬なし。

愚を賢となすの術なし。

燈臺もと暗し。

燈光の眞下は最も暗黒

なる所。

大慾は無慾。

大慾袋を破る。

喬木風多し。

高木は風に吹かるゝこ

と多し。

弘法にも筆の誤。

良匠も過つことあり。

一寸の蟲にも五分の 蠅にも忿怒あり。
魂。

物窮すれば通ず。

兩極端は相會す。

一年の計は元旦にあ

り。 月曜日は一週間の鍵。

月満つれば虧く。

満潮あれば干潮あり。

二兎を追ふ者は一兎

二箇の椅子に坐せんと

を獲ず。

すれば地に倒る。

四 秋の夜

幸田 露伴

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は美しき女

薨の浪間

天地の靈氣

の童の髪の如し。めでたきことは誠にめでたし。なつかしきことも誠になつかし。されどなほ聊か物足らぬ心地す。冬の月は水晶もて作れるものを見るが如し。清さはあまりありて味無きに近し。夏の夜の月の團々と大いなるが、海原の果より、松の樹の間より、又は市中の薨の浪間より出でたる、目ざましく、夜色も快くをかしけれど、たゞ我が魂の世に浮るゝをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身に浸入るやうなるを覺ゆることなし。

秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。仲の秋の五日六日の月の、いつか夕ぐれの空に出で居りて、雑木

かすけく囁
おのがじし
畫趣を爲す

月天心を過
光華六合に
わたる
ならでは

の梢もろこしの垂葉などに、風かすけく囁く、まづおもしろし。遠山黒く暮れて、月は光を増し、庭樹のそれぞれ、潤葉、織葉の葉表の照、葉蔭の闇、おのがじし畫趣を爲し、詩情を作りて、合して爽涼清澄の景を醸し出すさま、いづくにもありふれたることながら好し。夜更け蟲吟じて、世の中靜なる時、たま／＼燈前に書をさしおきて、起ちて廊を歩むをりから、窓の白きを看て、戸を推開きて出づれば、月は天心を過ぎて、光華六合にわたり、霜に澄める夜の氣は、水まさに凍らんとするが如くなる、身心頓に此の世のものならずなりたるやうに覺えて、秋ならでは、夜ならでは、月ならでは

はと思はる。

五 山 語

五十嵐 力

上野と信濃との國さかひ、荒船山の裾を東南に走り下つた谷間、そこに私は生れました。

(一)上野國北甘樂郡

岩戸村といつて、今でこそ、千に近い人家がありますが、此の物語のあつたといふ五百年も前には、幹に白苔の生えた老樹の松や杉が谷を蔽うて、其の暗い陰の裡に、梟が凄い音に鳴くといふ、淋しい處であつたでせう。其の頃此の村に住む百姓に、名を利太と呼ぶ男がありました。至つてすなほな木訥一偏の人間

木訥

夕日峯をかすむ
とぼくく

でありました。が、或日山へ行つて一日働いて、ちやうど夕日が荒船の峯をかすめて、猿の聲の遠く聞える時分に、山刀を腰にして唯一人、とぼくくと家路を辿つて來ました。

部落

彼の家は、谷川を隔て、向ふの山際に三四軒並んでゐる部落の眞中の家であつたのです。彼は何氣なしに、いつものとぼり土橋を渡つて、家の門まで來ました。が、其處ではからず異様な物の音に驚かされました。それは今まで聞いたことのない、非常に微妙な音樂の音でありました。

微妙
異様

利太は此の音が耳にはいるとひとしく、全く聽き

好奇
もつれた氣分

ほれてしまひました。さうして、恐れる心と、好奇の情と、慕ひ寄る心のもつれた氣分で、我知らず引返して、其のものの音の出處をつき止めようと致しました。しかし、其の音が何處から來るのか、どうしてもはつきりしなかつたので、彼は段々いらくした氣持になり、終には全く恐ろしさを忘れて、野山の間を何處ともなく駈廻りました。不思議な樂の音に恍惚として、藪も森も目に入らず、狐狼の叫聲も耳にはいらなくなつたのであります。

いらくした氣持

恍惚

夜一夜

それから、彼は夜一夜野山をさ迷うて、とうとう家に歸りませんでした。其の夜は冴えた月が荒れた野

誰彼なしに

山を物すさまじく照して居たさうです。其の中を彼は不思議な樂の音に浮れて、影法師の様にふらふらと歩いて居たのです。併し、此の樂の音は少しも外の人には聞えなかつたさうです。朝になつて、彼は自然と目が覺めました。目の覺めた時に、高い山の突出た岩の上に、氣の抜けたやうに立つてゐる自分を見出しました。

此の事があつてから間もなく、村人等は夕方になると、誰彼なしに、同じ樂の音に浮れ出すやうになりました。併し、此の樂の音は幸にして人間の體に少しも障らなかつたさうです。此の不思議なことは、其の

因む

純朴
粗野

後久しく續きました。が、幾年かたつて後、或夜利太の浮れて躍つた山の岩が、谷川を越して、向側に飛びました。其の時から此の微妙な音樂が、誰の耳にも聞えなくなつたといひます。

私の村の名はもと此の岩の飛んだ事に因んで、岩飛村と書いたさうです。さうして、後に字がむづかしくて書きにくいといふ理由から、いつの間にか岩戸と書くやうになつたのださうです。

私は此の美しい傳説をもつた村に生れたことを、非常に嬉しく思ひます。又純朴な粗野な利太にも、尙微妙な樂の音を懐かしむ優しい心があつた事を喜

びます。

趣味の傳説――

六 藤樹先生

橘 南 谿

(一)儒者。名は原。世に近江聖人と稱す。慶安元年(二三〇八)歿。年四十一。
(二)高島郡。今青柳村に屬す。
(三)明の大儒。
其の風を望む

(四)京都の學者。元祿四年(二三五)歿。年七十三。

(五)高島郡。
(六)滋賀郡。

(一)中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家に生れき。學王陽明の流を汲みて、其の德行一世に秀で、遠近皆其の風を望まざるはなかりきといふ。
(二)熊澤蕃山は先生の門人なり。此の人の先生に従ひし始を尋ぬるに、面白き話あり。
(三)其の頃加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至り

蘇る



中江藤樹

て泊りぬ。馬方、河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きつれば、財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。大いに驚き、急ぎ榎木に行きて、かの飛脚の宿れる家に到り、對面して委しく尋ね問ふに、其の人の忘れし物に相違無ければ、之を返しけり。飛脚は死したる者の蘇りたる心地して、行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、もし此の二百兩なくば、我が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に行はれん。されば

此の恩なかく、言葉のいひ盡すべきにあらず。まづ當座の御禮までに之を贈り奉る。と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚ける面持にて、そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮いふことかあるべき。とて、手にだに取らず。

こしらへいふ

理を盡し詞を盡す

色々にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする故、止むことを得ず、十兩となし、五兩となし、三兩となし、段々減じて、遂には金二步となし、せめてこればかりは、と、理を盡し、詞を盡していふに、此の金を受くる程ならば、二百兩をも留め置くべし。それだにかく返し申すからには、聊かにては、謝禮を受くるは、

氏素性

我が心にあらねど、餘りに餘儀なく宣へば、さらば鳥目二百文を賜へ。これは今夜休むべき所を、こゝまで追ひかけ來れる賃錢なり。我が取るべき錢なれば申し請くべし。といひて、二百文を懐にし、歸らんとす。

飛脚は感に堪兼ねて、其の氏素性を尋ね問ふに、名ある者にあらず。又何一つ知れる者にもあらず。只我が里の近くに、小川村といふ所あり。そこに與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふ事をせらる。某も折節往きて聞き申したるに、親には孝を盡すべし、主人は大切にすべきものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語

無理非道

り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり」といひすてて歸りぬ。

辛き命

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さても此の度は辛き命活きのびて、各方にも對面することを得たりとて、ありし次第を委しく語りけり。

蕃山をりふし田舎よりのぼり居て、學問修業の最中なりしが、此の物語を聞きて、其の人こそ眞の儒といふものなれとて、翌日すぐに江州に行きて、小川村に藤樹先生を尋ねて、隨從を願ひたるに、「人に教へ申す程の學徳なし」とて、更に許し給はず。蕃山ひたすら

師弟の契約

(一)岡山の城主池田光政。

格別のこと

に願ひて、二日が間先生の門にたゞずみて歸らず。先生の老母これを氣の毒がり、ともかくも内に入れ申せよ」とあるに、辭みがたくて内に入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

其の後、先生を備前侯の招き給へる時、其の身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり。お役にも立つべきものなり」とて、蕃山を出されけり。いづれも格別のことなり。

東遊記による

七 汽車の旅(三)

京都に滞在して、東山、西山に名所舊蹟をあちらこ

(一)明治天皇及び昭憲皇太后の御陵。山城國紀伊郡。

ちら見物し、桃山の御陵に參拜して九州へ向つた。大阪では一日見物し、神戸でも數時間を費した。大阪では商工業の繁華な有様に驚いて、仁徳天皇の御世をおもひ、神戸では湊川神社に參拜して、嗚呼忠臣楠子之墓を拜んだ。

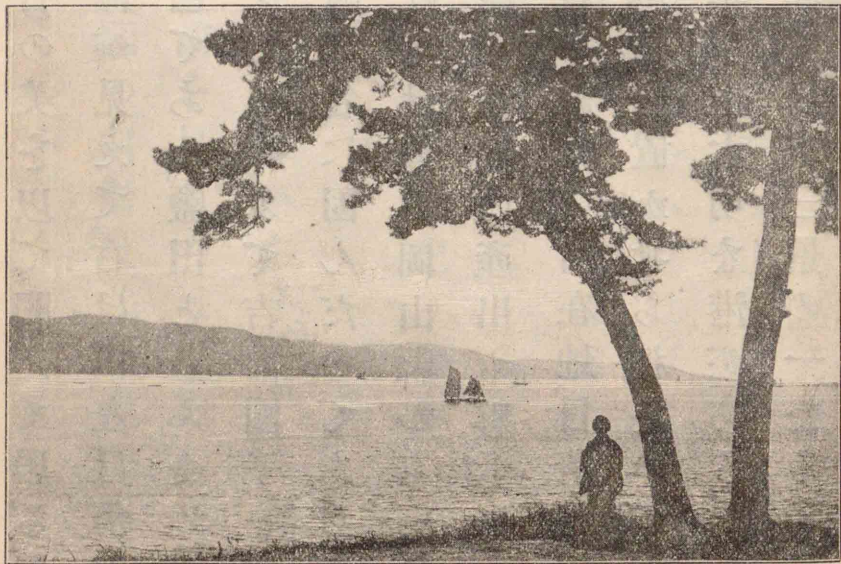
(二)淡路島通ふ千島のなく聲に、いく夜ねざめぬ須磨の關守。(金葉集、平兼昌)
(三)ほのくくと明石の浦の朝

神戸からの鐵道は山陽線で、海岸に沿うて奔る所が多いので、風景のよい事はどの線路も及ぶまいと思はれる。神戸を離れると、舞子から明石の浦々、淡路島は目の前に近く、幾十百の白帆が靜な波の上に浮んで居る。淡路島通ふ千島の。と歌つたり、ほのくくと明石の浦の。と歌つたりした風情も、自らしのばれる。

霧に、島がくれ行く船をしぞ思ふ。(古今集、讀人不知。但し小野篁の詠)

姫路の城は近頃立派に修繕されて、此の道中の一美觀である。眞白な城で、昔から鷺城といふ名があつたさうである。四十七士の故郷赤穂は、那波といふ驛の南三里にある。

岡山縣廳の所在地岡山には知合の人もあつたが、下車する暇は無か



舞子濱

泉石の美

つた。こゝの後樂園は泉石の美を以て聞えて居る。尾道あたりで、再び瀬戸内海が見えて、右は山、左は海、どちらを見ても美しい景色である。鹽田といふものも、此の旅で始めて見た。こゝらの驛々で吉備團子を賣りに來るが、これは昔の國の名に因んだのであらう。桃太郎の生國といふわけでは無い。岡山縣から廣島縣へかけては疊表の産地で、花筵の産出も夥しい。廣島は中國第一の都會で、縣廳の所在地、日清戦争の時、明治天皇は茲に大本營を置かせられたのであつた。近くに宇品、吳など軍事上大切な港がある。間も無く、又も瀬戸内海が現れて、日本三景の一たる嚴島

夢のやうに
浮ぶ
蜃氣樓

を汽車の窓から眺めた。海の中の大鳥居も、其の後に列る社殿も夢のやうに浮んで、話に聞く蜃氣樓とはこんなものかと思つた。岩國といふ處は有名な錦帯橋のある所。こゝはもう山口縣で、山口縣廳所在地の山口へは、小郡驛から支線で行くのである。下關は本州の西端、内海の入口で、安徳天皇を祀り奉つた赤間宮がある。神戸を出ると、一の谷の古戰場があり、こゝに着いて、平家一門の亡びた壇の浦を見るのは、歴史の上を旅して居る心地がする。下關の向岸は九州の門司で、此の間の海峽を關門海峽といふ。

八 大阪

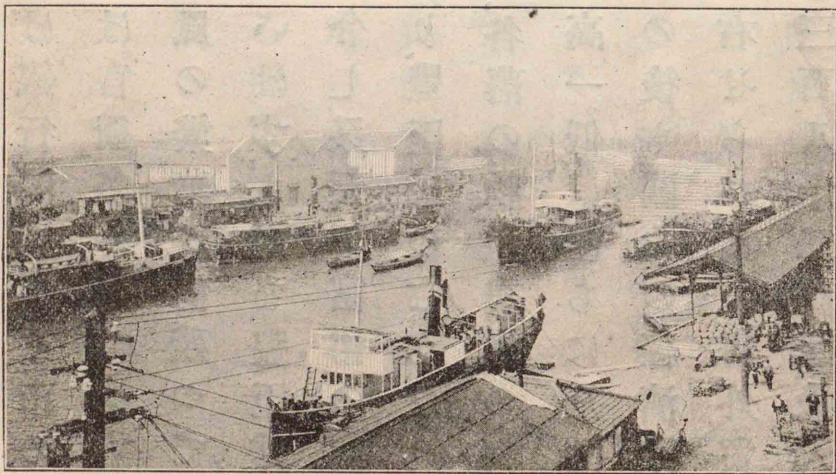
なには津に咲くやこの花冬ごもり
今を春べと咲くやこの花

古は浪速と呼び、今大阪と稱して、人口百三十九萬に上る本邦第二の都府。海内無双の商業地として、市街の繁盛、商況の活潑、首府東京にも優るかと思はれる。旅客一度大阪驛に下れば、家屋の構造、市街の區劃、道路の布置、市民の風俗、また全く一種の商業的趣味を帯びてゐるのを發見するであらう。地勢は概して平坦であるが、東部一帯は稍隆起して、低き丘陵性の

商況

布置

臺地を爲して居る。市域東西二里十九町、南北二里二十四町、面積三方里七〇、東西南北の四區九百十町に分れて居る。古來安治川以北を天滿、蜷川以北を北の新天地といひ、中央部を船場、島の内と稱し、南部は難波、新地といひ、西部には堀江、立賣堀、阿波座あり、其の最も繁華なのは船場、島の内で、淀屋橋通、心齋橋通が、特



大阪安治川口

いはずもが
な

(一)天正十一年。

波及す

に繁昌を極めて居る。船場には銀行、問屋多く、市の金融市場を爲し、堂島、中の島には官衙多く、京町堀附近には幕府時代に於ける大阪風の繁華が尙残つて居る。仁徳天皇の高津宮の古はいはずもがな、豊臣秀吉が此に城を築いて天下に號令し、又天下富裕の商人を集めてから、頓に繁華となり、豊臣氏の亡んだ後も、尙全國商業の中心地となり、各藩の物産交換の大手場として、此の地の物價の一高一低は、直ちに全國に波及したのである。王政維新の後も、關西の經濟界、商業界は全く本市によつて左右せられ、其の海外貿易額も、大正四年には輸出九千三百八十二萬圓、輸入五

舟楫の便

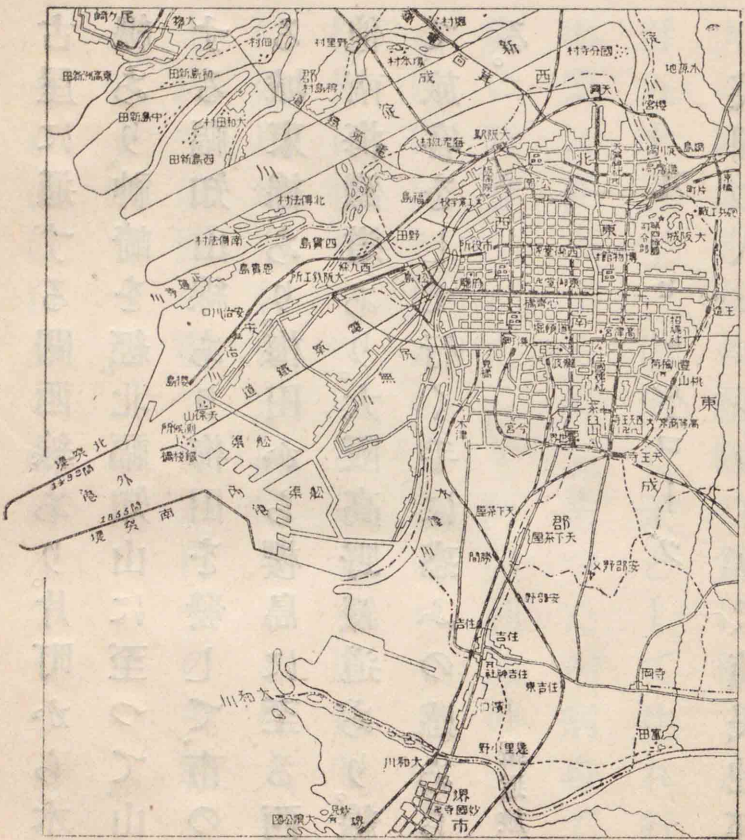
千六十一萬圓に上り、輸出は全國總額の一割三分、輸入は九分を占めて居る。中にも工業の盛なことは我が邦第一で、工業會社、諸工場多く、煙突から吐く煤煙は全市を罩めて、煙の都と稱せられて居る。市内には大小の河川が四通八達して、舟楫の便を備へ、南には攝津灣を控へて、海陸運輸交通の便が宜しい。其の煙の都たるは即ち水の都たるが爲で、水の都たるはやがて又橋の都たる所以である。見よ、山城より落ちて流るゝ淀川は、京橋を過ぎて寢屋川と合し、巨流いよく、西方に落ちて、こゝに中の島を作り、餘勢二流に岐れて堂島川となり、土佐堀川となり、共

夕陽西に春
づく

往くさ來る
さ

に西南に奔り、未また合して安治川となつて居る。これを市内の大河として、其の他木津川あり、尻無川あり、東横堀川あり、西横堀川あり、長堀川あり、道頓堀川あり、東西南北に流れる川々の數は四十五條に達し、之に架した大阪名物の橋梁は、大小併せて四百八十、八百八橋の稱に反かぬ。夕陽西に春づけば、淀の川瀬に燈火の影満天の星と落ちて、風にゆられる柳の絲の、招く手振に月もほのめいて、往くさ來るさの涼舟、目もくるめかんばかりである。

舊幕時代淀川の小さい三十石舟に静な夢を載せて、寝ながら伏見に着くのを無上の便利と考へたの



も、今は古老の物語となり、水の都の大阪は今蜘蛛の巣のやうに敷設せられた鐵道によつて、一入利便を感じることもなつた。京都から梅田の大阪驛を経て

線路交叉す

神戸に至る東海道線を始として、湊町驛から奈良、名古屋に通ずる關西線あり。片町から木津に至る片町線あり。神崎を經、北福知山に至つて、山陰本線に接續する福知山線あり。梅田を發して、市の東部を一周する城東線あり。梅田から櫻島に至る西成線あり。其の他南海鐵道あり。大阪高野鐵道あり。線路交叉複雑して、旅客をして行く手に惑ふの感あらしめるのである。

—鐵道旅行案内による—

九 セシル・ローヅ

Geoff John Rhodes 經營者

英國の人^(一)セシル・ローヅは殖民地經營者として、偉

Natal

大の功勳を其の祖國の爲に樹てた人である。一千八百五十三年、一僧侶の子として生れ、行くくは宗教事業に従事する筈であつたが、病身であつた爲、十六歳の時養生かたぐ阿弗利加のナタルへ行つた。そこには兄が居たのである。ローヅはこゝで金剛石の採掘に従事して、次第に其の財産を作つたが、其の間に、殖民地の經營が、國家のために大切な事を感じ、之を以て故國に盡すのが、自分の天職であると確信するやうになつた。

天職

Oxford

それには自分の教育を完うするのが第一と、一旦英國へ歸つて、オクスフォード大學へ入學した。併し

休暇には必ず阿弗利加へもどつて來て、半年は學問、半年は事業といふ異様な生活を送つたのである。一千八百七十三年病は再び重くなつて、今後の六箇月がむづかしからうとまで醫者には言はれたが、阿弗利加へ歸つて後、また次第に健康を取戻した。

政治的生活
Cape Town,
阿弗利加南端
の英國殖民地
ケープ・タウンの首府。
發端

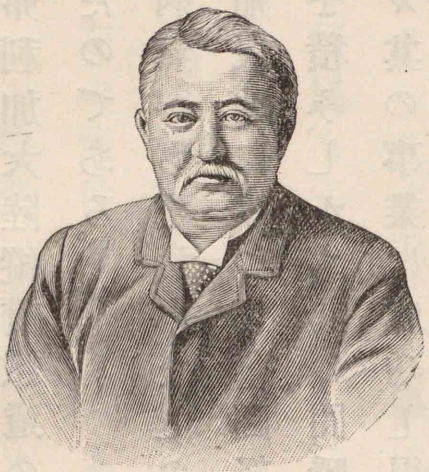
ローズが政治的生活は、一千八百八十一年ケープ・タウンの議員となつたのが發端で、一千八百八十四年には其の内閣に入り、九十年から九十六年にかけては、總理大臣の職に居つた。此の間ローズは常に英國の勢力を聯合殖民地の上に發展せしむる事に盡力したが、一方殖民地の爲にも、其の利益を増し幸福

を進めることに盡力した。

總理大臣となつた一年前に、南阿會社設立の特權

專務役

を得て、其の專務役とな



セシル・ローズ

つたが、これが英國殖民事業の大成功であつて、總理大臣となつてからも、常に同會社を指導して、英國の勢力を一日一

扶植

Limpopo.

日と扶植した。之より先、一千八百八十八年、英國の爲にリンポポの北方の領地を得たが、其の地はローズの名に因んでローデシヤと呼ばれて居る。

Rhodesia.

利權の下に置く
〔Egypt.〕
〔Cairo.〕
エジプトの首府。

ローヅが一生の事業は、阿弗利加殖民地全體を、英國利權の下に置くことであつて、其の第一歩として、北の方(一)エジプトの(二)カイロから、南ケープタウンまで、阿弗利加大陸縦貫鐵道の布設を計畫して、之に着手したのである。

病氣がちな資本なしの青年が、遠く故國を離れた殖民地に渡つて、奮闘努力の結果、自分も多大な資産を積み、しかも其の間瞬時も故國の利益を忘れず、着々其の事業に成功し得た事を考へると、「精神一到何事不成」といふ古語は、實に永久の眞理である。ローヅは一千九百二年、五十歳で世を去つた。さう

獎學資金

して生前に積み得た多大な資産は、國家的事業の爲には、惜氣もなく散ぜられた。中にも其の遺志によつて、オクスフォード大學に寄附した獎學資金の如きは、如何にもよくローヅの人物性格をしのばせるものである。

條件

ローヅ獎學資金を受け得る學生の資格として、凡そ左の條件が必要である。

第一、學業に優秀であること。

第二、フットボール(一)、クリケット(二)の如き遊技の達人であること。

第三、信義あり、勇氣あり、義務の觀念にかたく、義

〔Foot-ball.〕
〔Cricket.〕

俠の精神に富んで居ること。第四、將來公共事業を成すの人物であることが既に學生生活に於て認められるもの。

一〇 倫敦便

氣附

拜啓。昨日大使館へ行つて、同館氣附で御差出しの御手紙を受取りました。其の後は御變りもなく御勉學の由、何よりも結構に存じます。私もこゝに着以來もはや二箇月、諸處の見物も一通りは済ませました。着いた當座は東も西も分らず、地下を縦横十文字に走つて居る地下電車も不案内で困りましたが、今は

Hyde Park.

自然に覺えて、もうまごつく事ありません。新しく日本から着く人を案内したりなどして、あつぱれ倫敦通になつて居ります。唯今の住所は市の西の方で、有名なハイド・パークといふ大公園の附近の下宿屋です。宿泊人は十人程で、英吉利人の外、佛蘭西人、白耳義人、瑞西人なども居つて、食事の時は皆一室に集ります。日本人は外に一名も居らぬので少し寂しく思ひますが、語學の勉強の爲には、此の方が却つてよからうと存じて居ります。日本大使館は四五丁隔つて居ります。

在住日本人の組織して居る日本人會といふ俱樂部

俱樂部

部があります。これも遠くはありません。目下在住の同胞は大使館、領事館の人々が十二三人、陸海軍の將校が併せて二十四五人、私どもの様な留學生が十人、其の他は三井、三菱、郵船會社、正金銀行などの人々を始め、商工業に従事する人で、全體では三百人も居りませう。土曜の晩など、日本人會へ行けば、なか／＼賑かです。こゝでは日本食も出來ますから、折々行つて、故國の新聞を読み、故國の噂をするのを何よりの樂みに致して居ります。

(1) New York.
(2) Chicago. と
もに北亞米利
加合衆國の都
會。

紐育(1)やシカゴ(2)は賑かな場所も極つて居りますが、倫敦はさすがに世界第一の都で、何處へ行つても賑

かです。亞米利加からこちらへ渡つて見ると、やはり古い文明國の偉大な點が分ります。古い建築物や、古い記念碑や、皆英國の歴史、歐洲の歴史に關係を有つて居るので、見る物として面白い感想を浮ばせない物はありません。ウエストミンスター(1)、セント・ポールの大寺院など、どうしても亞米利加では見られないものです。倫敦塔へも行つて見ました。中世時代の武器の陳列が心を惹いたよりも、某王、某侯といふ名高い人々が露と消えた斷首場の跡を見て、思はずぞつとしました。日本國の歴史ほど美しい歴史は無いと、坐ろに感じました。

(1) Westminster.
or.
(2) Saint Paul.

(3) 倫敦市中テ
ムス河の邊に
在る古城。

坐ろに

South Kensington.

繪畫館は今は大戦中で一部分を開いて居るばかり、大英博物館も閉館して居りますが、同博物館の一部図書館だけは、毎日幾百といふ人が、大きな讀書室に集つて、靜にそれらの研究を續けて居ります。全部開いて居るのは南ケンシントンの博物館、こゝには理科、博物の標本などが澤山ありますが、最も感心したのは機械の標本で、一つボタンを推せば、電力で動くやうになつて居りますから、どんな精巧な新奇な機械も、一見して其の構造、作用が分るので、日本にもかういふ博物館が欲しいなと、同行の友人と語り合つた事です。

めげず



クーパー・ドイハ敦倫

倫敦の冬は日が短くて、霧が多くて、誠に鬱陶しう御座います。それでもハイド・パークあたりでは、氷滑が盛です。此の寒さにもめげず、男も女も戸外の運動に熱心なのは感心です。四月にもなれば、寒氣もだんくゝ緩んで、公園の青葉もそろそろ芽を出すさうで、

五月が日本の春の氣候ださうです。其の時分になると、色々の戶外運動が一層盛になるのです。いづれ其の中に又々お便を致しませう。皆様によるしく。

一一 洒落と機智

一 池野大雅の古瓦

池野大雅(一)勿來關址を訪うて其の遺瓦を拾ひ、之を錦の囊に納めて携へ歸りぬ。途中に二三人の兇賊あり、大雅が錦の囊を首に懸け、朝夕身を放たず秘藏するを見、これ必ず黄金なるべしと想ひ、三日の間後になり先になりて附狙ひしも、遂に其の隙を得ざりし

(一)有名の畫家。安永五年(一四三六)歿。年五十四。
(二)磐城國石城郡。常陸の國境にあり。

兇賊

平然
冷笑

呆然

かば、耐へかねて、或日路傍の茶店に憩ひし時、足下はよくも大金を持ちて獨旅せらるゝよ」といひけるに、大雅平然として、それは何の話ぞ」と問ふ。賊冷笑して、「足下の首に懸けたるものよ」といへば、大雅大いに笑ひ、錦囊の中よりかの破瓦を取出しつゝ、「貴客も亦かやうの物を好まるゝか。これは勿來關の遺品なり」とて見せければ、賊呆然として去りぬ。

二 頼春水の羽織

頼春水は山陽の父にして、學問を以て著れたり。赤貧洗ふが如く、常に白地の古羽織を着し、起居整然たり。或時友人なる菅茶山之に戯れて曰く、「あれ見ても

(一)安藝藩の學者。文化十三年(一四七六)歿。年七十一。
(二)備後の學者。文政十年(一八二八)歿。年八十。

赤貧洗ふが如し

久しくなりぬ古羽織」と春水言下に答へて曰く、「君の袴は幾代経ぬらん」と二人大いに笑ひき。

逸話選による

武運拙し

(一)源頼朝の臣。元久二年(一八六五)歿。年四十二。
(二)藤原泰衡の臣。名は維平。

怨敵

一二 武士は相身互に戦の勝負は時の運である。負けるものは武運が拙いのである。それ故、勝者としては、もとより負けたものを哀憐しなければならぬ。是に於てか「武士は相身互」といふ語がある。畠山重忠が俘虜たる由利八郎に向つて、
「弓馬に携はる者の怨敵となりて囚はるゝもの、漢

通規

沈淪

家本朝の通規なり。必ずしも之を耻辱と稱すべからず。貴客生虜の名を蒙ると雖も、永く沈淪の恨のこすべきにあらず。
と言つたのも此の意味で、八郎は其の意氣に感じたのである。

敵の勇武をふるまひを見ては、あつばれ敵ながらもと感心するので、敵も味方も感ぜぬものこそ無かりけれ。といふのが、ほんたうの武士である。敵となり味方となるも時の勢で、個人としての恩讐では無い。足利直義は六十六國に安國寺といふ禪寺を建て、敵味方の區別無く戦死者を弔つたのである。これに

恩讐

(一)尊氏の弟。正平七年(二〇一七)歿。年四十七。

殊勝

(一)平家の臣。壽永二年(一一八四)戦死。
(二)源義仲の臣。

孝養

さめぐ
老後の思出

地を替へれば同じ

は自分の罪亡しといふ意味もあるのであらうが、直義のやうな人物としては、殊勝の事といはねばならぬ。

平家の侍齋藤別當實盛は、白髪を墨に染めて、壯年の姿となつて、手塚太郎光盛に討たれた。木曾殿は御覽じ知るべし。とばかり言つて、遂に名乗らなかつた。義仲は其の首を洗はせて、此の首よく孝養せよ。とて、さめぐと泣いたとある。實盛が老後の思出に、髪を染め錦の鎧直垂を着て、平家の爲に命を殞したのは天晴の最後である。之を見て泣いた木曾勢も之に感じたのである。敵も味方も地を替へれば皆同じ事、決

人事では無い

(一)阿倍貞任。亂を起し康平五年(一一七二)敗死。年四十四。

(i)Stoessel.

して人事では無いのである。されば刀折れ矢盡きるまで、其の最善を盡しての最期は、敵ながらも同情しなければならぬ。源義家が貞任を追ひかけ、弓に矢を番へて、

衣のたては綻びにけり

と言つたのにつけて、貞任が、

年を経し絲のみだれの苦しさに

と答へたので、義家は矢を引きはづして逃したといふ昔話は、義家が貞任に同情した優しい心から出たのである。日露の戦争に、ステッセルは悪戦苦闘、數箇月の籠城の後開城した。明治天皇は其の露帝への忠

節を思ひやり給うて、特に軍人としての待遇を賜はり、帶劔をさへお許しになつた。此の寛大な勅命には、露人も大いに感動したといふことである。これが即ち我が國の武士道のなさけである。

一三 熊本城

大類 伸

熊本城は彼の勇猛無比の武將として知られた加藤清正の築いた天下の名城である。凡そ城郭といふものは、いづれも堅牢堅固でないものは無いが、熊本城の如きは、特に其の著しいものである。さればこそ封建時代の遺物でありながら、尙能く明治十年の役に

(一)豊臣秀吉の臣。慶長十六年(二七二)歿。

(二)西郷隆盛の亂。

(一)守將陸軍少將谷干城。

慄悍比なき薩摩隼人の軍を引受けて、籠城の目的を達し得たのである。

熊本城は丘陵の一角に築かれたもので、坪井川及び白川の流を天然の濠として居る。随つて城濠の見るべきものは少いが、其の高い屈折を極めた石垣は確かに一偉觀で、彼の名古屋城の天守閣の築造者として名高い清正が築いたに背かず、さすがに堂々たるものである。城内の通路の複雑な事、屈折をなして居る事も、やはり防備に注意した結果である。併し天守閣を始め、數多の櫓や多聞長屋の建築等は、極めて質素に出来てゐる。名古屋城は五層の大天守閣が全

部白堊で、壯麗の美觀を發揮して居る上に、燦として尾陽の空に輝く金鯨によつて、益其の名を天下に謳はれて居るが、熊本城の建築は之に反して、極めて見すばらしい。其の建物は黒い板張の建築で、本邦城郭の特色ともいふべき白壁造ではない。又其の屋根の工合なども、住宅建築に似たもので、城郭の壯麗を誇るべき外觀は備へて居ない。

さはれ

さはれ城郭の價値は實用であつて、外觀では無い。壯麗の威容も結構ではあるが、實戰に役に立たなくしては、何にもならぬ。熊本城は質素である。恰も風采の汚い野武士のやうな趣がある。併し實用の點は十分

野武士

に注意が屆いて居て、外觀は粗末でも、銃眼其の他側防、俯射の設備に缺けた點は無い。たゞ惜しいことは



熊本城

天守閣の建物が焚けてしまつた爲、今ではたゞ其の石垣が残つて居るに過ぎないことである。熊本

城の建築が黒い板張であるのは、敵の目標となるのを避ける爲と思はれる。岡山城の天守も板張で黒い

ところから昔から之を「鳥城」と稱して居るが、熊本城の如きは岡山城よりも更に「鳥城」であるといつても宜しい。

百戦練磨

彷彿せしむ

壯麗な名古屋城を、緋緘の鎧着て床几に腰をかけた大將に較べるならば、熊本城は即ち黒皮緘の鎧に身を固めて、大身の鎗を小脇に、馬を陣頭に進めた百戦練磨の勇士である。此の點に於て、熊本城は其の築造者たる加藤清正の倅を彷彿せしめるものといつて宜しい。質素儉約、しかも武備は一日も忽にせぬ。是こそ實に清正と熊本城と一致する點である。併し清正は決して武勇一遍の大將のみではない。人情に厚

灌漑の便

一再でない

く、殊に領内の民政には一方ならぬ功績を擧げて居る。城の濠となつて居る坪井川や、其の他肥後の四大川といはれて居る球磨川、緑川、白川、菊池川に大工事を施して、水運を便利にして船の通路を開き、又灌漑の便を計つて、新しく田地を開いたことが一再ではなかつた。而して此等の大工事は後世に非常な恩恵を残したもので、肥後平野の開墾は、實に朝鮮八道に鬼上官の名を謠はれた猛將清正に負ふ所が多いのである。又熊本城は別名を銀杏城とも呼ばれて居るが、これは清正の植ゑた銀杏樹が本丸に在るからである。

清正が試みた河流の護岸工事は堅固を極めたもので、後年大洪水で其の石垣が崩れた時、更に其の下に一重の石垣があることを発見した。萬一の際を慮つて、二重に石垣を築いてあつたのである。之によつても用意周到な清正の面目を察する事が出来よう。熊本城が質素にして實用に缺けた點の無い事も、やはり清正の事業としてふさはしいことと頷かれる。俗諺に「敵に勝たう(加藤)の城の主」と諺はれた清正は、戰場に馳驅する以外に、尙上の如き眞面目を發揮したのであつた。

ふさはしい

馳驅

一四 死して惜しまるゝ人となれ

嘉納治五郎

生れて而して長じ、長じて而して死す。禽獸かくの如く、草木かくの如く、人間亦かくの如し。されば人として禽獸、草木と異ならんと欲せば、生れがひある人たらんことを要す。予は更に前途有爲の諸子に向つて、死して舉國の悼惜を受くる人たらんことを望む。人生れて呱呱の聲を發するより、長じて一個の成人となり、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩徳一ならず。之を近くして、まづ父母の鴻恩あり。我等の生るゝや、自營の道を知らず、自活の

有爲
舉國の悼惜

黑白を辨す

道を知らず。たゞ泣くことを知り、笑ふことを知るのみ。此の間、晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が生長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらずや。之に次ぐに師長の恩あり。我等が僅かに黑白を辨する頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我に誨ふるに事理を以てし、我に説くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものは、我が師長にあらずや。

更に又至尊及び國家に受くる恩あり。至尊は仁慈

福祉
不逞

亂離塗炭の
苦

なる大御心を以て臣民を愛撫し、洪大なる聖徳を以て國家を統治したまひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、其の福祉を増進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我が父母師長をして我等に對する慈愛薰陶の務を完うせしめ、また我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむるなり。若し此の事無からんか、生民はこゝに亂離塗炭の苦に陥るならん。

されば我等の安全なる發育を遂げて一個の成人となるは、實に此等數者の恩あるに由るなり。然らば則ち我等が成人の後に於て此等數者に酬ゆるは、人

區々

間當然の義務にあらずや。然れども人間の生涯は實に區々たり。或は其の修養の時期に當りて、懶惰遊蕩の間に貴重なる光陰を送り、體軀徒らに長じて、方に自營自活以て我が生育の恩に報ゆべき時に至るも、無爲無能、其の父母の恩に報ゆること能はず、其の師長の恩に酬ゆること能はざる者あり。況や國家が生を成す所以に對ふることをや。朝に起きて而して食ひ、夕に食うて而して眠る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。これ所謂醉生夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なるものなり。

醉生夢死
蠹賊

裨益

又其の無能かくまで甚だしきに至らず、何等か一種の事に従ひ、國家に對して多少の裨益をなし、以て自活の道を求め、僅かに父母を養ひ、自ら衣食して一生を送る者は、之を前の醉生夢死する者に比すれば勝ること萬々なりと雖も、かくの如きは僅かに自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、其の一生の經營事業の永く後世に徳し、其の流風遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。かくの如きは我等の理想とすべき所にあらず。

流風遺韻

天賦の能力

我等は人間天賦の能力を善養し、利用し、其の畢生の事業は、以て我等が父母、師長、國家、社會に負ふ所の

餘裕綽々

鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽々たるものあり。後世子孫をして、永く其の餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを長に追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは、實にこれに外ならず。

生きて一郷の爲に功ある者は、死して一郷の爲に惜しまれ、生きて一郡の爲に盡せる者は、死して一郡の爲に哀しまる。若しそれ其の事業國家の進歩を助成し、其の忠誠よく闔國民に認めらるゝものに至りては、其の執る所の何の道たるを問はず、其の人の存否は直接、間接に國家の進運に關すること甚だ大なるものあり。是を以て其の人一たび逝くや、國を擧げて之を惜しまざるはなし。嗚呼、天下の廣き、逝く者は日夜にこれあり、而して其の死の天下に知らるゝもの、果して幾人かある。

闔國

遼遠

少壯の諸子よ、諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も、一生の覺悟は即ち今日より定め置かざるべからず。知らず、諸子は死して人に顧られざる人とならんとするか、一郷、一郡の爲に惜しまるゝ人とならんとするか、抑、亦舉國の悼惜を受くる士とならんと欲するか。

一國 士

(一)播磨國赤穂郡。城主は淺野内匠頭長矩。

及傷

危機
門閥

器局

一五 大石良雄 其の一

山路 愛山

赤穂(一)の城下は早馬の爲に大騒となりぬ。江戸城中
及傷の報藩邸に達するや、早水藤左衛門、茅野三平は
直ちに馬に跨がりて日に行くこと三十里、五日にし
て赤穂に達し、變を國老大石良雄に報じたるなり。長
矩自盡の命下るや、原惣右衛門、大石瀨左衛門は更に
同じ早さを以て赤穂に達したり。君家事あり、衆情恟
恟、危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中た
ぐふ者なく、而も濃厚にして庸愚なるが如き大石良
雄は、こゝに始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の

光を韜む

綽名なを蒙りて、久しく光を韜める彼は、衆人に驚異せ
られぬ。

恭順

赤穂城中の會議は開かれたり。事情は愈明白にな
りぬ。大野黨の一團は隱然として分れぬ。大野九郎兵
衛は良雄と同じく赤穂の家老にして、長矩に寵用せ
られ、且年老いて事に慣れたりしかば、班は良雄の下
に在りしが、勢力は却つて大なりき。彼は専ら幕府の
命に恭順すべきを唱へて、成るべく溫和に城を明渡
さんことを主張せり。然れども血氣に逸る藩士等は、
彼を以て卑劣なり、不忠なりとし、上使を引受け、城を
枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へ

城を枕にす

り。まづ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめんことを幕府に請ふべし。」と。

越えて二日、城中の會議は復開かれたり。良雄は前説を繰返せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の説に左袒せり。大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふことの、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始れり。四月十九日大野は遂に遁逃せり。人は滅ぜり。籠城は遂に行ふべからずなれり。

老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の説を執れり。復讐の説は勝てり。血判

左袒

(一)今の垣田市。城吉戸田采女正は長矩母方の従弟。

(二)元祿十四年。

難に投ず

に與る者百十餘人、其中江戸より來つて難に投ずる者僅かに十八人。

血沸く

道路は清潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八日赤穂城の上より、受城使の來るは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。城中より城外へ使者は往返せり。翌日城は難無く明渡されたり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穂藩士の餘りに溫和なるに驚きたり。

待設く

(一)山城國宇治郡。
優游自適

良雄は京都の山科に住して優游自適せり。田園を買ひ、居宅を營みて永住を粧へり。彼はかくの如くして身を四通五達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら

天下の視聽

(一)羽前國米澤侯。吉良家の親戚。

采邑

花謝し鶯老(一)京都。

晦まして上杉氏(一)の謀者を欺けるなり。謀者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護することに努め、人を遣はして吉良氏の邸を守らしめ、且其の采邑の人に非ざれば婢僕に用ふること無からしめき。是を以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。

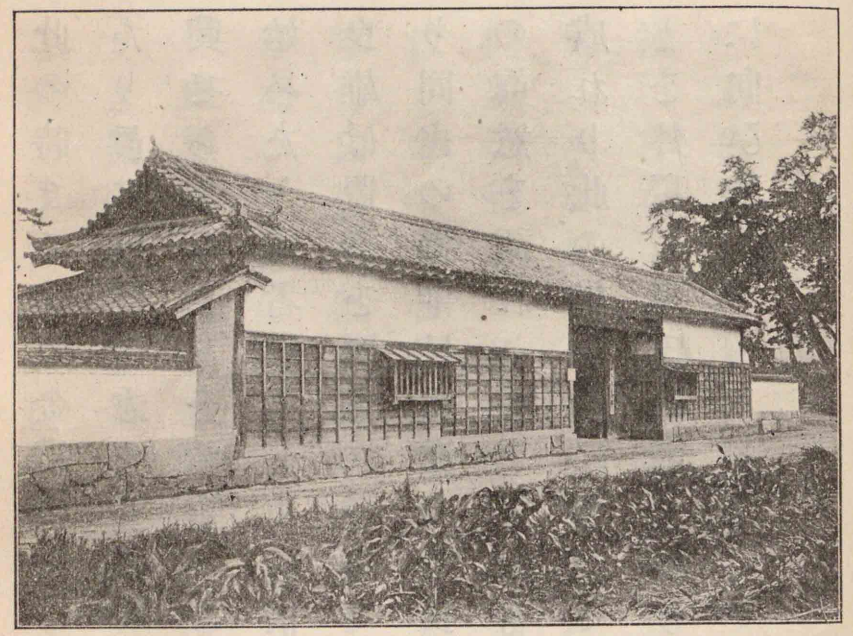
年は暮れぬ。記憶すべき三月十五日は再び來りぬ。赤穂の華岳寺は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し、鶯は老いて、四條河原(二)の夕涼に都の群衆雜

破廉耻

恬として
關り知らず

(一)通稱忠左衛門。一黨の古老にして、良雄に代りて江戸に在る同志の統領たりき。

一縷の望



赤穂大石良雄舊邸

沓する頃となりぬ。腰拔、賣國、破廉耻の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。而も彼は恬として關り知らざるもの如し。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮より來る。曰ふ、七月十八日長廣藝州に預けられたりと。一縷の望は絶えぬ。

此の時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣に困りて君家の或は再興せられんことを希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、亦復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄は是に於て彼等に其の眞意を語り、而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。此の年十月に至つて、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石束氏に託し、獨り長子良金を携へて江戸に向ひぬ。

外舅

一六 大石良雄 其の二

(一)江戸本所松阪町。
 (二)江戸麻布我善邸。今徳川侯

餘命おぼつかなし
 一死を賭す

(三)今は神奈川県橋樹郡。動靜

吉良氏の防衛は猶密なりき。彼は其の本所(一)の邸を以て卑濕なりとし、之を修補するまで、麻布(二)なる上杉氏の別邸に住へり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなきを以て、早く事を濟さんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。而も良雄は聽かざりき。良雄父子は直ちに江戸に入ること敢へてせざりき。彼はまづ池上(三)の平間村にありて、吉良氏の動靜を覗ひ、十一月五日に至つて、漸く江戸に入れり。父子

は變名して垣見五郎兵衛、同佐内と名乗りぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。

十二月に至つて、吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年は之を窺へり。彼等は何處より來り、何處へ去るを知らず。五更に至つて、他の一隊と交代せり。さすがの吉良氏も之に氣付かざりき。しかも間諜、探偵すべて効を奏せず、秘密は却つて吉良家に入する茶道より、同盟の一人横川宗利に漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明らかになりぬ。復讐の日は即ち定まりぬ。

十二月十三日に至つて、良雄は卒然淺野長澄の邸

(一)通稱勘平。

(二)長矩の室の實家。備後國三次城主。

欽仰

やはある

(一)江戸芝高輪。

に至りて、長矩の後室瑤泉院夫人に謁し、主家の預り金を會計して其の餘剩を還せり。しかも彼の一事は猶秘して語らざりき。蓋し夫人は夙に賢を以て藩士に欽仰せらる。去年の變、大學頭長廣は老中の命を受け、取る物も取敢へず、走り還つて夫人に告げたり。夫人は少しも驚かず、徐に問へり、仇人は誰にして、其の死生は如何と。長廣は義央の死生を知らざりき。夫人は曰へり、更に登城して後、再びわれを訪はれよ。兄死して、弟たる者仇の存亡を知らざることやはあると。かくて夫人は終身長廣に會はざりき。

翌十四日の朝、良雄は泉岳寺に至りて長矩の墓に

霏々

寂寥を破る
鬪諍叫喚

喧嘈

謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。此の夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集れり。火事装束せる四十七個の人物は、三隊に分れて吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬪諍叫喚の聲は聞えたり。既にして再び笛は鳴れり。火事装束せる四十七個の人物は吉良邸を出去れり。夜景は初の寂寥に返れり。

雪霽れて、夜も亦明けたり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは城をさして鹵簿を急げり。忽ち聞く、路人の喧嘈なるを始めて知りぬ。赤穂の浪士が吉良氏の邸を襲うて義央の首を獲たるを。

飛語紛々

(一)通稱助右衛門。

官裁

風説は區々たり、飛語は紛々たり。曰く、吉良氏を襲ひしものは獨り四十七人に止らず、此の外猶黒装束を爲せる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。曰く、上杉氏の兵は四十七人を追撃せり。曰く、淺野氏と上杉氏と相鬪はんとすと。良雄は吉田兼亮、富森正因を大目付仙石伯耆守の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀みて其の志を告げ、靜に官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて壯士を勞へり。人あり曰ふ、上杉氏の衆至る。と。良雄は同志を警めて防禦の備を爲せり。而して上杉氏の衆

は終に來らざりき。

此の日良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川(熊本)、久松(松山)、毛利(長府)、水野(岡崎)の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。

自裁

温藉

長者たる品
位失墜

元祿十六年二月四日、四十七人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の盃を賜へり。良雄は他の十六人と共に、幕府の檢使の前に自裁せり。良雄は外温藉にして、内に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事も打靜めて、騒がしきことを嫌ひたりき。彼は如何なる場合にも、長者たる品位を失

主一

Stoics.

職として…
由る

墜せざりき。然れども彼は徒らに平和を愛するものに非ず。なすべき事は必ずなし、遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職として此の品性ありしに由れり。

—愛山文集—

一七 復讐を報ず 大石 良雄

一筆啓上候。先づ以て舊冬は色々御厚志にあづかり、御蔭を以て其の夜かねて存じ立ち候通り同志相

しるし

催し、上野介殿屋敷へ打入り、手向ひ候家來は切捨て、本意の如く上野介殿討取り、しるしは泉岳寺へ持參致し、亡君顔前に供へ、去春以來の鬱憤を散ず。大慶御察し、貴丈にも御満足下さるべく候。折節上杉御人數打出で申さず、半弓其の外大勢を防ぎ候道具無益に成れるをかしさに、

覺悟した程には濡れぬ時雨かな

公儀

それより吉田忠左衛門、富森助右衛門を以て仙石伯耆守様御屋敷へ訴へ出て候處、翌夕公儀御評定の上、皆共儀諸侯四家へ御預に相成候。内拙者共十七人は細川公白(一)金御屋敷へ罷在、誠に以て日々御馳走共

(一)江戸芝。

冥加至極

武運に相叶

(一)赤穂藩の醫官。

冥加至極、有難き仕合に御座候。最早近々罪品仰付けらるべくと相待ち罷在候。段々武運に相叶ひ候儀、本望此の上あるべからず候。此の趣京都寺井玄溪宅へは貴丈より御通達御頼み申候。尤も皆共かやうに罷成候跡にて、定めて世間とりぐの雜説これあるべく、年月の寸志よくく、御存じの貴様に候間、其の時相應の噂下さるべく候。第一の芳志と頼み置候。右御禮かたぐ御意を得べき爲、餘命の内此の如く認め置候。恐々謹言。

一月二日

細井次郎大夫様(二)

大石内藏之助(華押)

(二)廣澤の號を以て知らる。儒者又書家。享保二十年(二二三五)歿。年七十八。

一八 新年

曆の改るとともに、人は一年づつ年をとるのであるが、實際は、其の度毎に生れ變つて若くなるのである。新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧れば、人の行爲には缺點もあり、失策もある。それを何時までもくよくよくしてゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行手に光明を求めるのが、處世の良法である。そしてそのれの好機、即ち年の改る日である。

行手に光明
を求める

くよくよ

復活

我が國には、昔から大祓といふ祭式によつて、過去のあらゆる罪を一掃し、汚れた心を打棄て、復活するといふ風習がある。これは六月と十二月との二度行はれたもので、即ち我が國民は、一年に二回づつ心身共に新になつて、復活し來つたのである。此の大祓の式は今でも行はれて居る。就中十二月は、年も新になる前であるから、此の復活の儀式が盛大に、且嚴格に行はれるのである。

そこで、我等は新年を迎へる用意としては、身分相應に、出来るだけ一切の物を新にし、清くして、形の上にも此の復活の義をあらはすことを務めるのである。

春秋に富む
還曆
古稀
簡樸

る。春秋に富む壯者は勿論還曆に入り、古稀に達する老人でも、其の生れ變る心持には異なる所が無い。正月の儀式は、太古の質素簡樸の風を傳へて、今日に至つたものである。注連繩や、樅葉や、白木の三方や、土器や、昔ながらの祖先以來の風を繼承して、毎年繰返してゆく所に妙味がある。即ち年々生れ變ると同時に、年々昔を憶ひ出してゆくのである。祖先から傳はつた掛物を懸けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。我が國民の宗家と仰がれたまふ皇室に於ては、我等が一家に於て、家の祖先を祀ると同様に、新年には

宗家

四方拜
元始祭

(一)越前國福井の歌人。明治元年歿。年五十七。
(二)古事記のこと。

(三)荒木田守武の句。

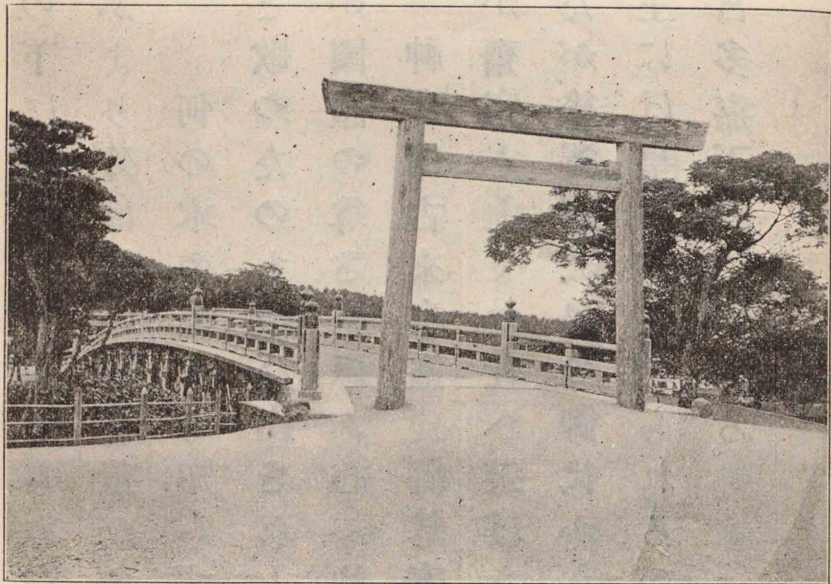
四方拜を行はせたまひ、また元始祭を擧げさせられ、内外臣僚を召させたまひて拜謁を許され、御宴を賜ひなどしたまふ。之を思へば、余等は今の世ながら、直ちに太古建國の昔を憶ひ起さずには居られぬ。余は橘曙覽の書に、
豊原春にあけてまづ見る書も天地の
宮嶽山田原はじめの時と讀出づるかな
といふ歌を、早くから深く感心して居た。これかの家元朝や神代の事も、おもはる。同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代とは離れぬものである。

一九 伊勢神宮

神域

(一)伊勢國度會郡大床山に發し、二見に至りて海に入る。

伊勢神宮には内外の二宮があつて、内宮をば皇大神宮と申し奉り、外宮をば豊受大神宮と申し奉る。参宮線山田驛に下車すれば、外宮の神域までは僅かに數町である。神殿の造りざま、御屋根は茅葺で、檜木の白木造、丹青の飾の無い處に、神代の質素な様も想はれて、此の上もなく尊い。外宮に参拜して内宮に参る。間の山を越えて五十町の道のりである。五十鈴川に架けた宇治橋を渡つて神苑にはいる。廣い芝生に若松の緑新しく、掃ひ清



(橋 治 宇) 苑 神 勢 伊

められた道には塵一つも無い。何といふ心持のよい事であらう。いよゝゝ進めば生ひ茂つた古い杉、古い檜、人間の世を離れたやうに思はれて、神威の尊さがしみと身にしむ。一の御鳥居を潜つて左へ曲り、二の御鳥居を通つて御垣

(一)松尾芭蕉。有名の俳人。元禄七年(二二五十四)歿。年五十一。

瞑想をこらす

油然

の下に跪く。飾らぬ彫らぬ白木造の御宮、神々しといふより外は無(一)い。昔芭蕉がこゝに詣でて、何の木の花とも知らず匂かなと歌つたのも憶ひ出され、しばし瞑想をこらす中、我が國體の尊さを思ふ心が油然と湧出るのである。神宮は古來皇室の御尊奉最も厚く、久しい間皇女が齋宮としてお仕へ遊ばされる例で、數百年間續いたが、後醍醐天皇の御代から其の事は絶えた。今は祭主には皇族が任ぜられるので、唯今の祭主宮は久邇宮多嘉王殿下である。

二〇 大海原の歌

坪内逍遙

大いなるかな、大海原。

朝に、夕に、どろくくと、

動き、轟き、夜もすがら、

大浪、小浪寄せかへる。

いづこに打たぬ浪を見ん。

いつ浪の音を聞かざらん。

大いなるかな、大海原。

世界の山々ことごとく

崩すとも、海は埋るまじ。

世界の川々絶間なく

不増不減の
瑠璃の色

注げども海はとこしへに、
不増不減の瑠璃の色。

長閑けき様は海にあり。

風風ぎはてし春の沖に、

朧にうつる月見れば、

荒ぶる心もなぎぬべし。

松島かげの朝ぼらけ、

蓬萊山もよそならず。

凄じさはた海にあり。

春秋二季の大あれに、

蓬萊山もよ
そならず

はやて起つて浪立てば、

甲鐵艦も木の葉と漂ひ、

大高潮の逆卷けば、

村々流れて跡もなし。

山は崩れ、川は涸れ、

國興亡し、人變り、

陸には古今の別あれど、

海原のみは開闢の

神代のすがた其のまゝに、

動き轟き、寄せかへる。

—國語讀本—

二一 極地の探検 其の一 新保 磐次

營利的

Cape of Good Hope. 西曆一四八六年葡萄牙人アズの發見。

鼻をあかす

極地探検これ近來の一大問題なり。遠く本源を尋ぬるに、極地の探検は最初營利的より起りて、後に學術的となれるなり。大昔の事は暫くおき、我が戰國時代の前より、葡萄牙人は阿弗利加の南端なる喜望峰^(一)を廻りて東洋に出づる航路を發見し、盛に印度と交易せり。されば航海を以て誇とせる英國人は、一層便利なる近路を求めて彼等に鼻あかせんとて、さてこそ極地の航海に力を用ひそめたるなれ。げに地球儀にて見る時は、歐羅巴より東洋に至らんには、喜望峰

嚴密にいふ

^(一)我が國の最東北端。

を廻らんより、直ちに北氷洋をつきぬくる方、遙に航路短ければなり。其の他鯨は北海に多く住むといふ中に、何れの邊に最も多く住むかを、探検するも、亦營利目的の一なりき。已にして北極航路の困難にして、實用に適せざるを知るに及び、目的は學術的となり、専ら氣象、磁石力、陸地の分布、動植物等の調査をなすに至りぬ。

極地を嚴密にいへば極圈以内なり。北極圈は我が千島の占守より北約五百里に在り。北極圈より北極點に至るには更に北方八百里なり。占守の嚴寒氷雪、交通の不便、食料の不自由等の話を聞けば、移住せる

進退谷る

人々の上を想ひやるもたゞ涙ならずや。まして極地の事なれば、風雪の險惡なる、固より筆舌のよく及ぶ所に非ざるべし。無數の大氷塊は海を蔽ひて流れ來り、熟練なる船員は右に避け、左に逃れ、努めて衝突を防ぐといへども、誤つて之に挾まるゝ時は、船は大抵押潰さるゝを免れず。一日の行程僅かに一哩餘に過ぎざることあり。或は氷雪に閉ぢられて進退こゝに谷り、氷の中に穴を掘りて其の内に數月を送ること少からず。かゝる間に限りある食料は盡き、或は久しく果物、野菜を取らざるため壞血病に罹り、一隊の勇士枕を並べて氷海孤島の中に死することあり。有名

Franklin, 英國の北極探検家。
Brenlund.

最期

なるフランクリン探検隊の全滅も、亦かくありしなり。最近に丁抹人^(一)ブレンlund^(二)が飢寒の爲に死せし時、最後の日記には左の如く記しありき。
「余は北緯七十九度に於て、次第に虧けゆく月の下に死す。余が足は凍り、四邊は暗し。行くこと能はず。二友の屍は此の灣の中央にあり。」
學術の爲、國家の名譽の爲とはいひながら、何ぞそれ最期の悲慘なるや。
かのフランクリン探検隊の全滅は、遠征史中の一大悲劇なりき。英國は續々と搜索隊を派遣し、八年の後、初めて彼等が一島に餓死せりといふ消息を得た

(j)Crimean War.
英、佛、土三國の聯合軍と露國との戰爭。
(西曆一八五三—一八五六)

り。然るに當時英國は(一)クリミア戰爭に忙しく、直ちに遺跡を弔する船を出さざりければ、フランクリン夫人は奮然として私費を抛ち、且友人の助を得て一つの搜索隊を發遣し、良人一行の遺骨及び遺物を収めたり。此の事件の搜索隊、前後四十有九、費用一千萬圓に及べりといふ。

かゝる困難の中に非常の大功を立て、世界の賞讃を博せし豪傑亦少からず。いで其の二三を紹介せん。第一はノルデンシヨールド、第二はナンセン博士、第三は讀者の耳に最も新なるペアリー大佐なり。

(j)Norden-skjold.

(二)ノルデンシヨールドは鑛物學者にて、瑞典國より

(j)Behning.
細亞と北亞米利加との二大陸を分つ。
使命を果す

派遣せられし探檢家なり。彼はフランクリンの航路に反し、亞細亞の北を通過して東洋に出でんとせり。途中氷に鎖されてそこに越年せしかど、其の間種々學術上の觀測をなし、遂に亞細亞の東なる(一)ベーリング海峽を経て東洋に出で、其の使命を果しぬ。歸途我が國にも立寄りて、盛なる歓迎を受けしは明治十三年のことなりき。嘗て徳川三代將軍の時、英國の探檢家は、國王より我が日本に寄せらるゝ書を奉じて同じ航路に就きしが、志を得ずして途中より歸りき。かくて此の航路全部を通過せし者は、古今唯ノルデンシヨールドあるのみ。

(1)Nansen. (西曆一八六一生)
(2)Peary. (西曆一八五四生)
(3)Greenland.

二二 極地の探検 其の二

(一) ナンセン博士はノルウェーの動物學者なり。(二) ペアリー大佐はもと米國の土木技師なりき。北亞米利加の東北にグリーンランドといふ一大陸地ありて、大部分極圏の中にあり。此の陸地は嶋なりや、或は北極まで續ける大陸なりや、また其の内部は如何なる有様なるか、近頃までは全く世に知られざりき。明治二十一年、ナンセン博士は此の陸地の東岸より西岸に向つて横斷し、内部は一帶の氷高原にして、人の住居に適せざるを報告せり。

洶涌

下圖の中左より二人目はナンセンなり。



ナンセンの北極上陸

ついでペアリー大佐は此の陸地の北部を横斷せり。彼は高原の北端より東岸に達し、海拔四千尺の氷の崖の上に立ち、四方をきつと見渡すに、洶涌たる氷海は東より北に周りて、此の陸の北極に接せざる事を發見せり。其の時の心地に雄快なりしぞや。ペアリー夫人は此の遠征に

同伴して、途中良人の病を看護し、遂に偉功を成さしめたり。夫人は又妊娠の身を以て、良人再度の遠征に随伴し、船中にて玉の如き女兒をまうけたり。此の女兒は最北に生れたる文明人として、世界に一種の名譽を得たり。

かくて後ナンセン博士は、流水が北極點附近を通過すべき徑路を考へ、之を利用して北極に到らんと期せり。明治二十六年、彼は堅牢なる一種の船を造り、古來探檢家の大敵とせる流水に乗じて、極海に漂流すること凡そ一年半、流水が稍北極に遠ざからんとするを見るや、決然として船を捨て、上陸し、橈によ

徑路

Jackson.

りて北極に向ひぬ。彼はいかにして再び歸るべき。大膽といふも餘りありといふべし。彼は行けども行けども高低凹凸の氷原にして、恰も滄海の大浪が其の儘凍りつきたらんやうなるを見て、只荷物の積卸に年を重ぬべきを念ひ、慨然として歸途に就きぬ。かくて或時は流水に乗り、或時は革船に乗り、千辛萬苦の後、とある島に着き、圖らず英國の探檢家ジャクソンに逢ひ、其の小屋に伴なはれて温き待遇を受けたり。ジャクソンが日記にかく記せり。

「小屋にて湯と石鹼とを與へて身體を洗はしめしに、三年の垢と脂肪とは容易に落ちず。數回ナイフ

にてこそげ落して、少しく清潔になりたり。其の勞苦、想ふべきにあらずや。ナンセン博士遂に歸國して、大探檢家の名譽を得たり。

一方にはペアリー大佐亦北極點を志し、遠征數回、其の間兩足凍傷して、八本の指を切斷するに至れり。不屈不撓なるペアリーは、明治四十二年四月六日を以て遂に北極に達し、こゝに米國の國旗を立てたり。此の時最低溫度華氏零下三十三度、蓋し北極は極地の最寒點に非ざるなり。これより先、米國の博士クック亦北極に達したりと稱す。されど世間は未だ之を信ぜず。

Cook

南極圈内の探檢はさのみ久しからぬ事にて、明治より凡そ百年ばかり前に始れり。これには航路發見の目的を含まず。たゞ捕鯨家の副事業と、純粹なる學術的觀測とに基づけり。近代の事なればにや、悲惨なる遭難の事實は北極探檢の如く多からざれど、暴風雪は南極の一名物にして、其の他内地凹凸の多き等、探檢を困難にする事情少からず。此の中にありて能く探檢家を歓迎し、遠征の勞苦を忘れしむる氣樂者あり、名をペンギン鳥といふ。此の鳥身長四尺許、翼短く、兩足を以て直立して雪中を歩むさま、頗る人間に似たり。各群中に王あり。一群皆王の後に隨つて列を

Penguin

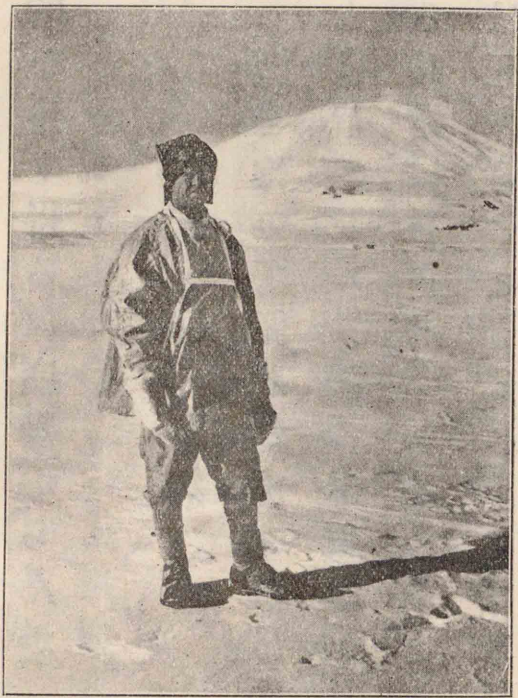
成し、人間の來るに逢へば、歩を止め、首を屈して敬禮し、それより人語の如き調子を以て長々と呟くこと、あたかも歓迎演説をなすが如しといふ。

(1) Shackleton.
(西曆一八七
四生)

(2) Scott.
(西曆一八六
八、一八七
九、一八八
一、一八八
二)

南極探検家の中にて最も著しき功を収めたるは、近時の英人シャックルトン大尉と同スコット大佐となり。大尉は明治四十二年南極を距る事僅かに五十里の點に達せしが、食料盡きて引返しぬ。四十三年スコット大佐更に探検の途に上り、必ず南極に至らんことを期す。英國皇后陛下は爲に國旗を親授し給へり。これと前後して諾威人アムンドセンあり。四十四年十二月を以て終に始めて南極に達し、次いでス

コット大佐も、翌年一月、一旦目的地に達したるも、歸路風雪に阻まれて、壯烈なる最後を遂げにき。



南極に於けるスコット大佐

(一)名は轟。

こゝに我が國に白瀨輜重兵中尉あり。早くより極地探検の志を抱き、身を寒地の氷雪にならしつつありしに、さき

にはペアリー大佐の成功を聞き、今又スコット大佐の志を聞き、雄心勃々、禁じ難く、匆々遠征の途に

終局の目的

上りき。其の結果は大ならざりしが、更に完全なる準備と忍耐とを以て此の志を繼ぐ者あらば、終局の目的を達し得るに庶幾からんか。

—女子國語讀本—

二三 眞の勇氣

坪内逍遙

[Sporta]

「楯を抱いて歸れ。然らざれば楯に乗せられて歸れ。」とは、昔スバルタ國の母親等が、其の子等の軍に出づる時常に言含めし言葉なりとぞ。戰國に生れたる者は、死ぬることを恐れずして、卑怯と言はるゝことを耻ぢたりき。

昔は勇敢の氣象を貴ぶこと今に倍せり。男は十四

徇ふ

五歳にして戰場に出でし例幾らもあり。日本武尊は十六歳にて熊襲を誅し給ひ、爲朝は十八歳にて九州を徇へたり。只昔の勇氣は腕力と殺伐とを伴ふを例とす。今いふ勇氣は其の意味廣し。

(一)名は幸盛。戰國時代の皇子。六年(一二三六)歿。年三十六。

戰國の武士山中鹿之助は大勇士とならんと志して、七難八苦に遭はしめ給へ。と常に神に祈りたりといふ。又或人は、

憂き事のなほこの上に積れかし

かぎりある身の力ためさん

と詠みたりき。何にてもあれ、苦しきこと、怖ろしきものの折重りて攻寄するを怖るゝ心無きが勇氣なり。

只怖ろしき苦しさを忍ぶばかりのことは女も爲し得る所なれど、進み戦ひてこれに打克つは、男ならでは爲し易からず。腕力は生れつきにも由ることなれば、乏しきも是非無し。勇氣無きは男子にあらず。されど勇氣にも階級あり。弱き者を苦しむるは勇に似て勇にあらず。

我意を張る

盲人蛇におぢす

暴虎馮河

我が腕力を頼み、又は多勢の後援を頼みて、妄に我意を張りて人と争ふことを好むが如き、又は何の思慮準備も無くして危きことを試みるが如きも、盲人の蛇におぢざる類なり。これを向ふ見ずと言ひ、粗暴と呼ぶ。即ち暴虎馮河の勇なり、眞の勇氣にあらず。

(一)豊臣秀頼の臣。元和元年(一六二五)陣歿。年二十。
(二)平清盛の父。仁平三年(一一八三)歿。年五十八。

奸曲

眞の勇者は、我が善しと信じたることの爲にのみ戦はんと欲す。故に軽々しく危きに近づかず。されど一たび其の事に當りては、命をも惜しまぬなり。或は單身にして悪人を取挫ぎ、或は弱者を救ふ。人の知ると知らざると、援くると援けざるとは問ふ所にあらず。つまり勇氣を見せびらかさぬが眞勇の證據なり。茶坊主に辱められて争はざりし木村重成の優しき、油つぐ老僧を手捕りにせし平忠盛が思慮沈着など、好き例なり。

同じく眞勇といふうちにも、文明の今日は、十年、二十年引續きて艱難と戦ひ、奸曲を取挫ぎ、幾たび敗れ

ても屈すること無く、斃れて後已む勇氣をこそ養ふべきなれ。 — 中學修身訓 —

二四 伊能忠敬の晩學 其の一 幸田露伴

忠敬年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家を其の子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意専心、唯伊能家の衰へたるを興し、おのが任務を最も圓滿に、最もうるはしく果さん事を期し居たりき。

およそ、才氣あるものの常として、己が欲せざる事には、一舉手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲する

(一) 下總國香取郡佐原町の人。舊姓は神保。文政四年(二四八一)歿。年七十七。自ら抑ふ平々凡々

一舉手一投足の勞

情を屈し氣を抑ふ

才氣
徳量



伊能忠敬

事にのみ身を委ねんとするは、免れ難き習なり。たとひ己が欲せざる事なりとも、其の爲さざるべからざる事なる以上は、甘んじて我が情を屈し、我が氣を抑へて、我が爲すべき事をなすは、其の人畜に才氣あるのみならず、亦實に徳量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少し。年少にして才のみ勝れたるは、譬へば、鋭き刀の肉薄きが如し。物

奇才を抱く

市井の凡人
に伍す

を截ることはよくすべし、折るゝ虞は免るべからず。されば世に、奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡し難し。忠敬が算數、曆術の學を嗜み、且之をよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし。といふを唯一の望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠したるが如きは、實に其の徳量の大きいなるを見るべきなり。

かくて伊能家は興りぬ。景敬は家を繼ぎぬ。一家の事また憂ふべきもの無し。忠敬が伊能家に對する義務は、こゝに於て圓滿に果されたりといふべし。

老境に入る

爲すある人

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。此の時は忠敬年既に五十歳。常人にありてはもはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途有望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合も、我が力を試みるべき處たり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずる事なかれ。

二五 伊能忠敬の晩學 其の二

さる程に、忠敬は其の郷里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一様に笈を負ひて郷關を出で、都門に遊びて師を尋ね、學に就くところの書生と異なるところは、唯其の若きと老いたるとの差のみ。かくして忠敬は身を己が好める學に委したるが、己が満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。

をりから幕府には曆法改正の擧ありて、之がため

笈を負ふ

(一)大阪の人。名は至時。文化元年(二四六一)歿。年四十六

特に大阪より高橋^(一)作左衛門といふ者を召出でたり。作左衛門、東岡と號す。算數曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、其の學の深きに服して、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひおのれが學業など其の人に及ばずとも、尙強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、いかでか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき。喜びて其の門下生となれり。然れども同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば屢、笑柄と

笑柄

晩學

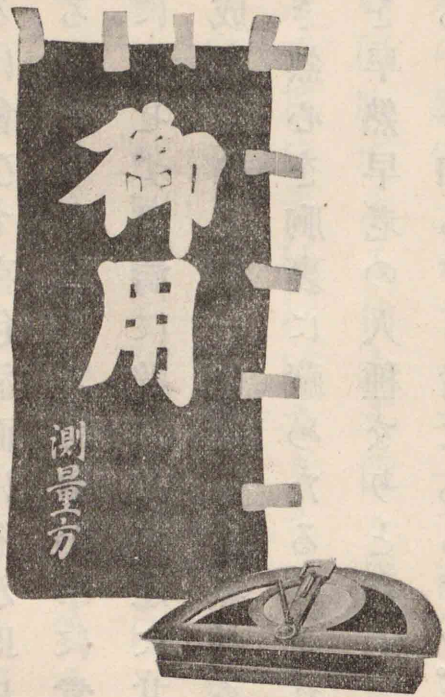
なしたりといふ。
 晩學の難きは實に何れの世にありても、かゝる事實の存するが故なり。こゝを以て、非凡の士にあらざれば、大抵自ら耻ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて、墓穴に入るに至るなり。本來よりいへば、老いて學ぶは、たまく、其の志の淺からざるをあらはすのみ。また何の不可かあらん。況やまた何の耻づべきことかあらん。思ふに區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於ては唯蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみか、れば忠敬と同門學生との優劣勝敗は、比較するまでも無く明らかなることな

蛙鳴蟬噪

決潰

蘊奥を極む
肩を比す

り。忠敬の學術はさながら堤防の決潰して洪水の押し寄すが如き勢を以て歩を進め、終に其の學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべき者無きに至れり。
 かくて忠敬が初めて幕府より測量の命を蒙り、修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實に其の年五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、



伊能忠敬の測量用旗及器具

頽齡

勇往直前

人は頽齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂に其の志すところを完成したりしは、一に此の元氣勃々として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟、早老の人種なりと言ふ。これ豈我に伊能忠敬あるを知らざる者にあらずや。

— 露伴叢書による —

二六 朝鮮雜觀 其の一

〔G.H.P.〕 教育家兼宗家。一八四三年生。明治四年日本御雇教師たり。

『ミカドの帝國』を書いた亞米利加人グリフィスは、朝鮮を「仙人國」と呼んだ。此の仙人國も今は我が大日本の新領土となつて、一千萬餘の仙人も皆我が新しい同胞である。仙人も段々俗人の仲間入をして、活動して貫はなればならなくなつたが、黒い冠をかぶり、白い衣を着て、悠然として市街をあるいて居る朝鮮紳士の風采を望めば、如何にも仙人らしい容子が今でも見える。人毎に長い煙管を携へて居るのは、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、此の長い煙管、其のものが、優長といふ感を一層強からしめるのである。

貴賤上下悉く純白な着物を纏うて、見渡す限り眞白なのは、全世界中恐らくは朝鮮ばかりであらう。夏だからさうなのでは無く、冬でもやはり同じである。これには一つの傳説があつて、昔或時代の王様が父王の死を悲しんで、始終喪服をつけて居られたので、人民がみな之に倣つたのだといふ。一應聞けば尤もらしい殊勝な話であるが、此の傳説は無論作り事であらうと思ふ。何處の國でも古い時代には眞白な着物が流行るが、其の中に色々の染色や縞や飛白の衣裳が行はれる。文化の他の方面が種々に變化を受けたにも拘らず、純白の衣服が數千年の後までも行は

れて居るのは、實に不思議といはねばならぬ。萬事萬端支那を崇拜した國として、此の國俗を變へなかつたことも、考へれば面白い事である。

子供は折々桃色や、萌黄や、藍色の着物を着て居る。それも全部同じ色で、日本の娘の子の様に、美しい花紅葉の染模様では無い。婦人も間々紅色、萌黄色の衣を着けて居るが、模様や縞は少しも無い。殊に婦人が「長衣」といつて、我がかつぎのやうなものを着て、目ばかり出してあるいて居るのは、日本の古代の風俗其の儘で、服制に多少の相違こそあれ、大體に於て古い繪卷物を見るやうな心地がする。低い屋根の下で眞

桑瓜などを食つて居る容子は、何處と無く今昔物語をまのあたりに見るやうである。現在の生活に於て朝鮮人が優長といふばかりでは無く、朝鮮の歴史其のものが優長で、今でもやはりそろくくと、昔の歴史が流れて行くのでは無いかと思はれる。

衣冠を正しくす

衣冠を正しくすることは、慥かに朝鮮人の一美風であるかとも思ふ。どんな卑賤な人でも、滅多に肌を露すことは無い。之は寒い氣候の關係から、自然習慣となつた所以もあるかも知れぬが、とにかく素肌を人前には出さない。支那の労働者も身體の上部こそあらはせ、腰から下は出さないが、朝鮮人で肌を脱いで居るのは、終に一人も見なかつた。

朝鮮人は雨具を用ひぬといふことはかねて聞いて居つた。今は田舎でも蝙蝠傘を手にしてあるいて居る人を見受ける。それよりも不思議に感じたのは、雨降の時に、冠の上に小さな傘を載せて居ることである。竹の骨で油紙を張つたものである。成程日本のからかさには之を大きくしたものだ。なと感服した。又頭に雲水坊主のかぶるやうな深笠の大きいのかぶつてあるいて居るのが往々ある。あれは何かと聞けば、喪中の人で、喪中は一年、二年、三年必ず常にあの笠を着けて居るといふ。如何さま舊い禮儀はやかま

Silkhat

しい處だ朝鮮、支那、土耳其皆それぐの冠物を今にも保存して居る。日本人は古い物を保存して居るが、新しいものは又何でも用ひる。洋服に下駄も履き紋附の羽織(ウ)にシルクハットもかぶる。

二七 朝鮮雜觀 其の二

朝鮮人の物を運ぶのは、男は背で、女は頭である。男の背には例の支繫チキといふものをかけて、一切の物をそれで運ぶ。八百屋が唐茄子や胡瓜を賣るのにも背に負うて來るので、日本のやうに天秤棒で両端に擔ぐことは無い。すべてが山に柴刈に行く昔話の爺さん

ん式である。女は洗濯物でも何でも頭に載せて行くので、これは京都の大原女式である。しかし大原女のやうに張板や梯子などをかついてあるくのは、見受けなかつた。

朝鮮には虎が居る。竹に虎といふから、竹も澤山ありさうに思ふが、竹は少い。これは氣候のせいである。竹の簾や、扇子や、竹細工もいくらかあるが、概して日本のやうに竹を種々の工業には使つて居らぬ。南の新領土臺灣は竹の名所で、唐竹真二つ割で天秤棒の代りにしたり、竹で船を作つたりして居るが、京城では竹竿一つ見附からぬ。洗濯物を干してあるのを見

唐竹二つ割

ると大抵繩にかけ渡してある。又田舎などでは、丘の上
上にひろげて並べてあるだけである。桶、盥のやうな
ものにも、竹の籬たがは無ない。竹の無ない所へ行くと、今更に
竹の効用の廣ひろいのに驚かれる。水道栓の側で水を酌しやく
んで居る朝鮮人を見ると、皆ブリキの石油の空函くわん
を用ひて居る。如何にも貧乏げにあはれに見える。
瓢箪ひょうたんをたち割つたものが水を酌しやくむ杓子しやくし
であるのは、古風で面白い。

朝鮮人の履物は、男も女も一種の靴であつて、日本
のやうな下駄、足駄は見當らぬ。靴の下に足駄の齒は
のついたものはあるが、鼻緒はなごを立て、其の鼻緒はなごを足の

藝當

指にはさんで歩くといふ藝當は、日本人より外には
出來ぬのであらう。

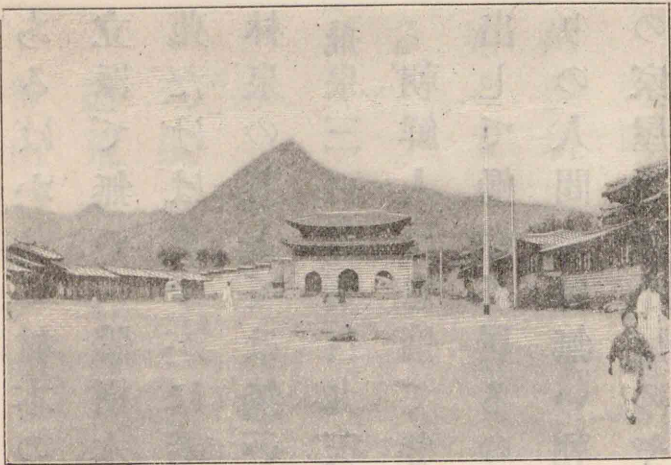
朝鮮の家は如何にも低くて、むさくるしく見える。
京城にはさすがに瓦葺の家も見えるが、田舎は殆ど
藁屋ばかり。其の藁の葺方が、日本の如く綺麗に端を
そいで無い爲、唯藁を打ちかけたやうに如何にもき
たなく見えて、遠くから見れば、豚小屋の様にしか見
えぬ。寒さを恐れるため窓が尠すくいから陰氣で、日本の
田舎家のやうにからりとして居らぬ。日本のは小さ
くても、きたなくとも、からりとおつ開いて居る。あれ
では夏はさぞ暑からうといへば、日が透らぬから割

合に涼しいとのこと。床は土で、其の下が温突ヌントクで、冬は火を焚いて暖めるのである。元來朝鮮では、庶民には二階建、三階建を禁じたのである。それ故庶民の家は皆低い。地に這つて居るやうである。又家をあまり立派にすれば、金持と認められて、すぐに取立てられるから、金持でもわざと外觀を汚くして居たやうな原因もあらう。併合後新築する鮮人の家には、段々と二階造の高いのも出来るさうである。

それに比べれば、王宮は比較にならぬ程規模も大きいし、立派である。就中さきの王宮景福宮は、大院君の造營せられた宮殿で、幾多の宮殿樓閣が相連つて、

(一)朝鮮李太王生
父李景應の尊稱。

膏血を絞る



景福宮興化門前

廣いものである。これを造る爲には、民の疾苦をも顧ず、人頭税までも課して作り上げたといふ。いはゆる民の膏血を絞つて築いたので、此の宮殿が即ち李朝に崇つたのだといはれて居る。

此の宮の正門興化門前の通などは、幅六十間、東京にも滅多に無い。現王宮昌徳宮も拜觀したが、これは近世の洋風(一)に塗替へ、西洋の椅子、ソファ(一)などがあつて、面目

(Sofa)

林泉の美

が改つて居る。併し總じて建築には丹碧を塗附けてあるばかりで、材木の削り方、仕上方は日本のやうに立派で無い。一體樹木の少い京城に、昌徳宮の裏の秘苑だけは、さすがに老樹が生ひ茂つて居る。併し何等林泉の美としては無い。小さい溪流の石に題した句に、
「飛泉三百尺。疑自九天來。」とあるのには驚いた。

乃至は

朝鮮人は怠惰で労働を嫌ふといふが、農業に精を出して働いて居るのを見ても、決してなまけるばかりの人間では無い。朝鮮の山を禿山にしたのも、朝鮮の家屋を豚小屋のやうにしたのも、乃至は長煙管をくはへて悠然として南山を見て居る白衣の民を作

〔苛政猛於虎〕
〔禮記〕

つたのも、皆古來の惡政の罪である。

〔一〕苛政は眞に虎よりも猛である。憫むべき我が千萬の新同胞は、今や仙人の生活を次第にはなれて、嬉嬉として我が聖天子の德澤に霑ひつゝあるのである。

二八 八道の山

大町 桂月

〔二〕八道の山よ、いざさらば、年の七年戈執りて、

踏荒したる日の本の 益荒雄は今歸るなり。

釜山の浦の秋ふけて、 空もしぐれの夕間暮、

波路遙に帆を揚げて、 汝と今や別るなり。

〔三〕朝鮮八道

益荒雄

夕間暮

知遇
(一)支那をいふ。

異境の山

(二)石田三成。秀吉の臣。慶長五年(二二六〇)家康を討たんとして關ヶ原に戦ひ敗れ、斬らる。秀吉の臣。三成に黨し收れて殺さる。

知遇の恩に身を捨て、^(一)四百四州を我が駒の蹄に蹴んと勇みしも、譽めて夢ゆめなれや。我を知りにし太閤の世になき後は誰が爲に、千里の外に戈執りて、異境の山に軍せん。耻をしのびて故郷に、歸るも後に死なん爲。主君の家の行末を、思へば重き命なり。あはれ太閤世を去りて、よつぎの主は幼し。^(二)石田、^(三)小西の小人ばら、かならず事を誤らん。我が幼時より育ままれ、主恵に浴みし豊臣の家を護りて死なん身の、永くは住まじ世の中に。跡に見捨つる益荒雄の亡魂若しも知るあらば、

三途の川や六道の門、^(一)此に暫く我を待て。これを限りの見納に、^(二)今一度と見返れば、幸波音すごく雨荒れて、野山は霧に朧なり。八道の山よ、いざさらば、^(三)吾國の譽とたゝかひて、花と散りにし日の本の男子の骨を護れよや。

—黄菊白菊—

二九 峠の茶屋 夏目漱石

「おい」と聲を掛けたが、返事が無い。

干軒下から奥を覗くと、煤けた障子がたて切つてある。向側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに底か

屈託

ら吊されて、屈託氣にふらりと揺れる。下に駄菓子箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せである白の上にくれて居た雞が、驚いて眼をさます。ククク、クククと騒ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる。其の上に眞黒な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜か分らない。幸ひ下は焚きつけてある。

床几

返事が無いから無斷でずつとはいつて、床几の上に腰をおろした。雞は羽ばたきをして、白から飛びお

とぐるを捲

悠長

りる。今度は疊の上にあがつた。障子がしめて無ければ、奥まで驅抜ける氣かも知れない。雄が太い聲でコケッコッコといふと、雌が細い聲でケケッコッコといふ。まるで自分を狐か狗の様に考へてゐるらしい。床几の上には、一升枱程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐるを捲いた線香が、日の移るを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。烈しかつた雨も次第に収まる。しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香

のんき

はのんきに燻つてゐる。どうせ出るには極つてゐる。しかし自分の店を明放しても苦にもならないと見えるところが、少し都とは違つてゐる。返事が無いのに床几に腰をかけて、いつまでも待つてゐるのも面白。其の上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

活人畫

二三年前、寶生の舞臺で高砂を見た事がある。其の時これは美しい活人畫だと思つた。箒を擔いだ爺さんが橋懸を五六歩來て、そろりと後向になつて、婆さんと向ひ合ふ。其の向ひ合つた姿勢が、今でも眼につく。自分の席からは、婆さんの顔が殆ど眞向きに見えたから、あゝ美しいと思つた時に、其の表情はびしや

橋懸

表情

Camera

血を通はした程

りと心のカメラに、焼きついてしまつた。茶店の婆さんの顔は、此の寫眞に血を通はした程似てゐる。

「お婆さん、こゝをちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸御困りで御座んしよ。おうく、

大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げ

ましよ。」

「そこをもう少し焚きつけてくれ、ば、あたりなが

ら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へい、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、「しつ、しつ」と二聲で雞を追ひおろす。ココココと驅出した夫婦は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛出す。雄の方が逃げるとき、駄菓子の箱の上へ糞をした。

一筆がき
無造作

「まあ一つ」と婆さんはいつの間にか剝拔盆の上に茶碗を載せて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけてある。

婆さんは袖無の上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。自分は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

「閑靜でいいね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「ええ、毎日の様に鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は先刻の雨で、何處ぞへ逃げました。」

折柄竈のうちがぱちくくと鳴つて、赤い火がさつと風を起して、一尺あまり吹出す。

「さあ御あたり、さぞ御さむかる。」

といふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながら、微かな痕をまだ板底にからませてゐる。

「あゝ、好い心持だ。御蔭で生返つた。」

逡巡
もどかしと
ばかり
一角

「いい工合に霽れました。そら天狗岩が見えます。」
逡巡として曇勝なる春の空をもどかしとばかり
に吹拂ふ山嵐の思ひきりよく通り抜けた前山の
一角は、未練も無く晴盡して、老嫗の指さす方に、荒削の
柱の如く聳えるのが天狗岩ださうだ。——草 枕——

三〇 安宅 坪内逍遙

身を篋す
(一)能美郡。小松
町の西一里。

時しも頃は春の初風まだ寒き北國路を、いたはし
や義経は、兄頼朝の疑を受け、奥州さして落ちて行
く。主従僅かに十二人、辨慶を先達に、山伏姿に身を
篋し、日數程經て加賀の國、安宅(一)の港に着きにけり。

きつと

義いかに辨慶、旅人等の噂によれば、安宅には特
に關を設けて、山伏を厳しく取調ぶる由、如何に
すべきぞ。
辨、それはゆゑしき御大事なり。きつとこれにて
御工夫あるべし。

人々、いやく、何程の事かあらん。唯打破つて御通
りあるべし。

辨、いやく、打破らんは易けれど、大事の前の小
事なれば、成るべくは穩かなる手段を取りたし。
義、然らば辨慶、ともかくも其の方の工夫に任せ
ん。よろしく計らひくれよ。

大事の前の
小事

強力

(一)華嚴宗の大本山。聖武天皇の建立。大佛を以て名高し。

辨「畏つて候。先づ考へ出したる事は、我等かく山伏に身を窶せども、包み難きは我が君の御品格なり。畏ながら暫く強力に御身を窶し、御笠深く召され、我等の笈を負ひて、わざと後に下つて御通りあれかし。さなくば忽ちに見出され候はん。義げにく、これは尤もの事なり。」
姿を窶し主従は、やうやく關に近づきて、通らんとすれば、關の役人富樫左衛門、
富「やあく、山伏、關なるぞ。名をなのれ。」
とぞ呼ばはりける。
辨承つて候。これは奈良東大寺建立の爲に、北陸

勸進

殊勝

さればなり

論より證據

道を勸進する山伏にて候。
富「それは殊勝の事なれども、山伏なるからは、此の關は通し難し。」
辨「して其のいはれは。」
富「さればなり。賴朝、義經御不和により、義經殿には山伏と姿を變へて、奥州へ落ちらるゝ由。故に諸國に新關を設けて、山伏をかたく止むるなり。一人も通し難し。」
辨承つて候。しかし贗山伏をこそ止めらるゝならめ。まことの山伏を止め給ふ必要あらじ。」
富「あらむづかし。論より證據なり。まこと東大寺

聽聞

あらばこそ

即智

まことしやかに

紅は園生に植ゑてもまぎれなし

建立の勸進ならば、勸進帳のあるべき筈ぞ。茲にてそれを讀上げられよ。某此にて聽聞せん。

辨何と、勸進帳を讀めとや。心得申して候。

もとより勸進帳のあらばこそ、笈の中より有合の卷物一つ取出し、勸進帳と名づけつゝ、即智を以て文を綴り、まことしやかに聲高々と、天も響けと讀上げけり。富樫つくづく聞きすまし、

富最早疑晴れて候。御通り候へ。

辨かたじけなく候。

げにや、紅は園生に植ゑてもまぎれなし。後にしたがふ強力を、富樫目早く見とがめて、

一期の浮沈

仰天

そらとぼけ

奇怪千萬

富いや、暫く其の強力は通し難し。とゞまれ。

と罵りぬ。すは我が君をあやしむは、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立ちどまる。

辨慶騒がず、そらとぼけ、

辨やい、強力め。何とて早く通らぬぞ。

富いや、それはこなたより止めたるなり。

辨そは又何故。

富あの強力が姿、義經殿に似たる故なり。

辨奇怪千萬、義經殿に似たりとや。しかいはる、強力めは一生の名譽ならんが、さりとは腹立たしや。けふのうちに能登境まで行かんと思へ

憎さも憎し

打擲

ばこそ強力を雇ひたるに、僅かの笈を重げに負ひて、人々に後るればこそ貴人かとも怪しまるれ。憎さも憎し。いで懲してくれん。

金剛杖をおつ取つて、さんぐくに打擲す。

これはと驚く人々を、辨慶目にて制しとめ、尙も激しく打据ゑたり。富樫やうやく疑念を解き、

富富これは我等が誤なり。其の強力には構無し。とくくとくく一同御通りあれ。

といふに人々ほつと息、毒蛇の口を逃れし思。さらばさらばと立ちあがり、關路をあとしづくとと、奥州さして下りけり。

— 國語讀本 —

ほつと息

(一)海軍中佐。明治三十七年旅順口に戦死す。年三十七。
先考
(二)中佐の父廣瀨重武。
(三)山縣小太郎。

有終の美を濟す

手書

三一 閉塞隊の出發に臨みて別を

兄に告ぐ

廣瀨武夫

第一次旅順口閉塞の擧に對し、先考(一)と山縣先師(二)とに代り武勇絶倫の賞詞を賜ふ。此の賞詞は他の千萬人のあらゆる稱讚の辭にまして、弟の最も榮とする所なり。而して友情切々、上士の功に誇らざるを訓へ、更に有終の美を濟さんことを望ませらる。感激の至に勝へず。

今や第二次閉塞隊として福井丸に上らんとす。賜ふ所の手書は、先考の眞影と共に収めて懷に在り。弟

天祐

は天祐を確信し、再び其の成功を期すると共に、武士として決して家名を汚すこと無きを自信す。

七生報

國

一死心

堅

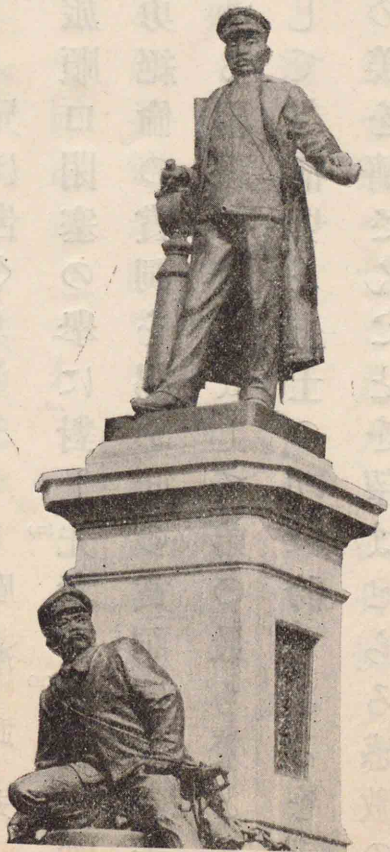
再期成

功

含笑上

船

愈御武運の長久ならんことを祈る。再拜。



(田神市京東 像銅のと長曹兵野杉と佐中瀬廣)

明治三十七年三月十九日

頑弟武夫

兄上様

第一次閉塞に際し、八代兄其の寫眞を贈つて形影相伴なふの意を寓せらる。今回も同じく収めてポケットにあり。

(一)兄廣瀬勝比古、當時の海軍大佐。
(二)海軍大將八代六郎、當時の朝日艦長。
(三)Pocket. 形影相伴なふ

勤王大義太分明。報國丹心期七生。

傳家一脈遺風在。盟舉名聲弟與兄。

寄家兄言志

弟武夫

幾回いふも志は同じ。弟は七生人間滅國賊の楠氏兄弟の精神を以て我が精神と心得候。

— 廣瀬中佐詳傳 —

三二 最後の授業 其の一 菊池 幽芳

休みたいのを耐へて、いつもの通り僕は學校へ出掛けて往つた。

ぼかく
からりと
お喋舌

今朝は天氣はぼかく、暖いし、其の上、空はからりと晴れてゐる。森のはたでは、お喋舌の黒鳥が囀り、牧場では、木挽小屋の後の方で、普魯西兵が調練をやつてゐる。

ありとある

村役場の前を通りかゝると、小さな鐵柵のある掲示場の前に、大勢の人がたかつて居た。二年此の方、ありとある不吉の報知や、負けた戰報や、徵發の事や、普

魯西方のいろく、の命令や、そんな厭なものが、みんな此處から來たのだ。また何かあるんだなと考へながら、足も止めず、アメル先生の小さな校庭へはいつて行つた。

Prook.

開いて居る窓から見ると、僕の仲間は、もうみんな銘々の腰掛に並んで居て、アメル先生は、恐ろしい鐵の定木を抱へ込みながら、其の前を往つたり來たりして居る。僕はそつとはいつて、僕の机の前に坐つた。僕は、アメル先生が青色の上等のフロックを着て、綺麗に襟の所で襷を取つた笹縁のシャツをつけ、參觀日か賞品授與式の時でなければ被ることもない

縁取の黒の絹帽を被つて居るのに氣がついた。そればかりか、教場には何か非常の事でもありさうで、嚴かな空氣が満渡つて居た。

しかし、一番僕の驚いたのは、教場の奥の方のいつも空虚な机の前に、村の人が僕等と同じく黙つて坐つて居る事であつた。其の人達の中には、三角帽を被つたオーゼー爺さん、前の村長さん、前の競賣吏員さんなどが居た。そして此の人達は、みんな悲しさを顔をして居るのだ。オーゼー爺さんは、縁の蝕んだ古いABCの讀本を持つて來て、それを膝の上に乗せ、大きな眼鏡を開いた頁の上に置いて居た。

競賣吏員

Berlin.
Düsseldorff.
Lothringen.
佛國の領地なりしが、西曆一八七〇年普佛戰爭の結果獨逸領となりしなり。

僕が驚いて居る間に、アメル先生は講座に上つた。そして優しい、しかも嚴格な聲で僕等に言つた。

「わしの子供達、これが御前達にわしの教へる最後の授業だ。伯林^(一)から命令が來て、エルザスとロートリ^(二)ンゲンの小學校では、獨逸語の外教へてはならぬと云つて來たのだ。新しい獨逸の先生が明日着くことになつて居る。今日は佛蘭西語の教へしまひだから、わしはお前達に一所懸命聞いて貰はなければならぬ。」

此の僅かばかりの言葉が、僕をあつと動轉させてしまつた。あゝ、何といふみじめな事だ。村役場の揭示

動轉

みじめ

は其の事だつたのだ。

僕の佛蘭西語の學びしまひ。其の僕は、まだろくろく書く事さへも出來ないのだ。もう僕は習ふことも出來ないと思ふと、學校を休んで禽の巢を探し廻つたり、河で氷滑をしたりして無駄に費した時間が、今更怨しくなつた。つい今の先まで、重がつて荷厄介にした教科書、文典の本も、宗教の本も、今となつては別れのつらい舊い友達のやうな氣がする。

荷厄介

先生が取つておきの着物を着て來たのも、此の最後の授業に敬意を表する爲だつた。村の老人達の様子も、今まで此の學校へ度々來なかつたことを悔む

やうに見えた。此の人達の來たのは、四十年も此の小學校に居て、立派に職務を盡してくれた僕等の先生に、感謝の意を表する爲でもあつたし、また失はれた祖國に對する義務を盡す爲でもあつたらしく想はれた。

三三 最後の授業 其の二

僕がこんな事を考へて居る時、僕の名を呼ばれたのに氣がついた。僕の諳誦する番が來たのだ。僕は早速第一の言葉にまごついてしまつた。胸が一杯にこみ上げて來て、顔を擧げることすら出來ず、腰掛から立

つたまゝ、身體の權衡を取つて居ると、アメル先生の言ふ聲が聞えた。

「フランツ坊や、わしは今日はお前を罰しはせぬ。併しお前は罰せられるのが當然だ。お前などは毎日おきまりにいつて居たことだ。いつでも時間はあるのだ。明日勉強すればよい」と。どうだ、今日といふ今日、其の結果がお前に分つたらう。全體エルザス人の教育を、いつも其の通りに明日に延して居たのが、エルザス州の何よりの不幸だつたのだ。今になると、敵國の奴等はいふだらう、「何だ貴様達は、それでも佛蘭西人だといふのか。佛蘭西語が書けも讀めもしない癖

に」と。それに何と返事が出来る。

先生の言葉はそれからそれへと盡きなかつた。先生は、佛蘭西語は我々の先祖からもち傳へた大事な詞だから、我々は此の詞をよく護つて、決して忘れてはならない。假令一國民が、奴隸の境遇に落ちようと、其の國の詞を護つて居る間は、ちやうど牢屋の鍵を持つて居るやうなものだと説いた。

そして先生は、文典を取つて僕等に讀んで聞かせた。僕は自分でよくそれが解つて行くのに驚いた。先生の説明が、實によく僕の頭にはいつて行くのだ。僕はこんなによく先生の言ふことを聞いて居たこと

も無ければ、先生もこんな辛抱して説明したこと
も無かつたであらう。此の氣の毒な先生は、こゝを立
去るに就いて、自分の知つて居るだけの事を、一度に
みんな僕等の頭に詰込んで行かうとするやうに思
はれた。

稽古

其の課目が終ると、今度は習字の稽古に移つた。先
生は特別に僕等に渡してくれる爲に、新しいお手本
を用意して來て居た。其のお手本には、美しい丸い字
で「フランス、エルザス。フランス、エルザス」と書かれて
あつた。

銘々がどんなに一所懸命字を習つたか、見せたい

やうであつた。一番年の行かぬ生徒等でさへ、一心に
ちやんと覺悟して、これもまだ佛蘭西語だといふ風
に、習字の線を傍目も振らず引いて居た。

屋根の上では、鳩が低い聲で咽喉を鳴して居たが、
僕はそれを聞きながら考へた、「鳩も獨逸語で啼くや
うに教へられるのかしら」と。

— 幽芳集による —

三四 皇室と國民

西洋各國の歴史を見よ。支那の歴史を見よ。一朝亡
びて一朝興り、革命に次ぐに革命を以てし、昨日まで
は九五の位に居まし、帝王にして、今日は斷頭臺上

九五の位

(Siberia)

不可解

の露と消え給ひしも尠からず。近くは全露西亞皇帝の、俄に其の位より逐はれて、シベリヤに一流人となり、はか無き最期を遂げ給ひしが如き、我が國民より見れば、殆ど不可思議、不可解の感無くばあらず。外國の事情をのみ知りて、日本の國史に明らかならざるもの、動もすれば世界の近況を見て、我が國家の將來を危む。これ實に我が皇室と國民との關係を知らざる徒なり。

外國の歴史の記す所を見よ。國王と人民とは從來仇敵に等しかりき。國王はあらゆる豪華を極め、あらゆる収斂を敢へてして、唯自己の慾を満さん事を努

収斂

め、姦臣之を助けて、暴虐至らざる無し。國民の憤怒は火山の噴火の如く、抑壓其の極に達して後、革命となりて爆發す。歐洲各國の歴史みな然り。支那歴代の興廢は、幾回と無く之を繰返したるに過ぎず。王者と人民との争果てし無きに至りて、民衆は自由を求めて止まず、其の極る所共和政府の設立となれるは、今古外國史の示す所なり。

我が皇室、人民を愛撫し給ふこと初より父母の親の如し、百姓を稱へてオホミタカラ(大御寶)と稱へ給へるは、上古よりの事なり。人民は皇室の別家なりといふ考もて、自らヤツコ(家の子)と稱せり。古來の神祇

豊穰

(一)後醍醐天皇御製。

(二)後柏原天皇御製。治め知る

紛擾
權臣

を祀るや、天皇は民の爲に年の豊穰を祈り、人民は天皇の爲に玉體の安全を祈りて、曾て私の利害の爲に禱らず。仁徳天皇の宮室を營み給はざりし、醍醐天皇の寒夜に御衣を脱し給ひしを始にて、
 世をさまり民安かれと祈ること
 わが身に盡きぬ思なりけれ
 治め知る我が世いかにと浪風の
 やそしまかけてゆく心かを
 の御製は皆同じ御心なり。
 日本歴史の紛擾は、皇室間の御不和か、權臣が野心の結果にして、一として皇室と人民との間の争たる

鞏固を加ふ

(一)甲斐國東山梨郡七里村。
 (二)同郡八幡村笛吹川の岸。
 (三)平安朝末の歌人。

(四)平安朝末の歌人。

もの無し。これ實に各國の歴史に無きところにして、萬世一系たる皇統の、世々を経て益鞏固を加ふる所以なり。

三五 國を祝ふ歌

よみ人しらず

しほの山さしでの磯にすむ千鳥

君が御代をば八千代とぞ鳴く

藤原良經

わが國はあまてる神の末なれば

日の本としもいふにぞありける

藤原俊成

かみかぜや五十鈴の川の宮ばしら
幾千代すめとたてはじめけん

源 實 朝

あす

山はさけ海はあせなん世なりとも
きみにふた心われあらめやも

宗 良 親 王

君のため世のため何か惜しからん

すて、かひある命なりせば

本 居 宣 長

さしいづる此の日の本の光より

高麗もろこしも春を知るらん

(一)江戸時代の國學者。伊勢松坂の人。享保元年(一八二〇)歿。年七十七。
(二)後醍醐天皇の皇子。

(一)徳川末の勤王家。元治元年(一八六〇)歿。年五十八。
(二)京都の歌人。安政元年(一八五〇)歿。年五十八。

あまつ風吹くや錦の旗の手に

平野國臣

靡かぬ草はあらじとぞ思ふ

千種有功

天地とたち分れけん始ありて

はてこそなけれ葦原の國

伴 林 光 平

ますらをの屍草むす荒野らに

咲きこそ匂へ大和なでしこ

加納諸平

君がため花と散りにしますらをに

(四)和歌山の歌人。安政四年(一八五三)歿。年五十。

(三)攝津の學者。義を唱へ、元治元年(一八六〇)歿。年五十二。

みせばやと思ふ御代の春かな

自讀文

一 最も偉大なる豪傑

第一段 (金曜日、中學校の教場)

校長、今度の月曜日の宿題を上げます。「最も偉大なる豪傑」といふ題です。これまでに讀んだ書物の中で、一番えらいと思ふ豪傑の例をお舉げなさい。學生吉田、友達に聞いてもようございませうか。それとも自分で考へ出すのですか。校長、自分で考へ出すといふことにしたい。學生逸見本を見てもいゝんでせう。校長、本は宜しい。課題を調べるに参考になる様な本は、何でも見て宜しい。ちやうど鈴が鳴つた。課業をしまひます。(校長退場)

學生倉本、天下第一の豪傑は誰だらう。僕にはあてられない。學生入江君、當てるのぢやない。考へるのだよ。學生城、そんなにむづかしくはない。僕はもう分つた。吉田、先

一 最も偉大なる豪傑

生の言つた事が、僕等の考へてゐる通りなら、僕にも解つてゐるんだが、先生が題をお出しになつた時、妙な笑顔をなさつたから、僕等が考へてゐるのよりも、もつと深い意味があるらしい。倉木、とにかく、歸つてゆつくりと考へよう。」

(一同退出)

第二段 (月曜日の朝、學校の門前)

逸見、入江君、豪傑を考へ出したか。「入江、考へ出したとも、少し考へてすぐ解つた。」逸見、さうか。みんなさうしたらう。さあ急いで行かないと、時間に後れる。」

(吉田、倉木、城來る)

入江、やあ、皆來た。諸君お早う。城、入江君、豪傑は解つたか。「入江、胸のポケットを叩いて見せ」
「大丈夫、ちやんと此處にしまつてある。」倉木、其のポケットにはいる豪傑なら、鉛筆の様な小さなのだらう。「入江、それでも君のより大きいかも知れないよ。」吉田
「さうだ、入江君の言最も理あり、袋が大きいからといつて、中味が良いとは限らない。」(校長來る)

逸見、やあ、丸井校長だ。「一同、先生お早うございます。」校長、豪傑を選んで來ましたか。「一同、はい、皆調べて來ました。」(一同退出)

第三段 (教場、生徒着席)

伎倆
はたらき。

校長、さあ、どういふのが眞の豪傑か、一人々々に尋ねて、選んだ豪傑の名を聞くことにします。城、一番にお答へなさい。城、私は豪傑といふものは、非常な伎倆をもつてゐて、何人をも恐れず、あらゆる敵のうち勝つものだと思ひます。校長、成程尤もだ。だがまだ何かおとしては居ませんか。城、先生、此の上にごういふ資格が要るか考へられませんか。校長、よろしい、外の人に聞いて見よう。しかしおまへの豪傑の標本は誰ですか。城、豊臣秀吉です。校長、えらい人を選びましたな。しかし私は、秀吉には豪傑たるものの具へて欲しいと思ふ、或資格が缺けてゐる様に思ふ。今度は倉木、お前の豪傑の定義を言つて御覽。倉木、先生、私は豪傑といふものは、強ち偉い大將に限らぬと思ひます。寛仁大度で、能く人の過を恕し、それと同時に志が堅固で物に驚かず、己の生命よりも社會同胞を愛する人でなくてはならぬと思ひます。私は中江藤樹先生を選びました。校長、大層面白い。倉木の定義はよほど面白い。また選んだ人物も立派だ。處で逸見は、逸見、私は源頼朝

定義
ある事柄の中
に含まれた意
味を引きくる
めていひあら
はす言葉。

一 最も偉大なる豪傑

生民
人民。

を選んで來ました。併し頼朝は平家を亡して、父の仇を報い、六十餘州の人民を驕る平家の暴政から救ひ出したが、之と同時に、利己心の爲に奔走した様に思はれるから、或は眞正の豪傑とはいはれぬかも知れません。尤も倉木君の説を聞くまでは、それに氣が付きませんでした。校長、逸見のそこに氣の附いたのは至極宜しい。頼朝の兵を擧げた動機は、國家生民のため、平家の虐政を除く爲であつたとは思はれぬ。其の志を得て後の行を見ても、博愛などいふ高尚な事を理想として居たらしくもない。……入江、お前の豪傑は、入江先生、私も豊太閤を選びましたが、今皆さんの説を聞いて、間違がわかりましたから、徳川家康にします。家康は智もあり、勇もあり、寛仁大度で、慈悲深く、天下を太平に治め、民を安穩幸福にすることに努めて、遂に三百年間無事昌平の代を作りました。」

校長、宜しい。入江、お前が秀吉に代へて家康を選んだのは賛成だ。さあ吉田、お前の意見は、吉田先生、私は一所懸命古代の豪傑を調べて見ましたが、満足を得ませんでした。まあ孔子の様な人が、眞の豪傑たるに近いかと思ひます。孔子は最も深く善惡の別を辨へ、これによりて天下億兆の民を、人の人たる正道に導かうとしましたが、亂世で用ひられなかつたから、遂に弟子を集め、書を著して、其の道を百世に傳へました。かういふのでなければ、眞の豪傑とはいはれぬと思ひます。」

校長、吉田の考が一番大きい。まづ今日の優等の答案です。之については倉木、入江だ。成るべく廣く社會人類の幸福を増進せしめた人が一番えらいのです。しかし、さういふ立派なことをするには、いろいろの困難があつて、並大抵では出來ぬが、就中一番の困難は、自分のわが儘に克つといふのである。孔子も「己に克つは仁の本。」と言つてゐられる。或場合には、わが儘どころか大切な我が命を棄て、社會國家のために盡さねばならぬ事もある。「殺身成仁」といひ、「獻身犠牲」といふのはこれです。

犠牲
いけにへ。

『己に克つ者は眞の豪傑なり。』

といふ西洋の格言を覚えて戴きたい。他人に勝つよりも、まづ自分のわが儘私慾に克たなければ、眞の豪傑とはいはれない。」(一同退出)

(一)京都東北の山。山上に天台宗總本山延暦寺がある。

拂曉 夜のあけがた。

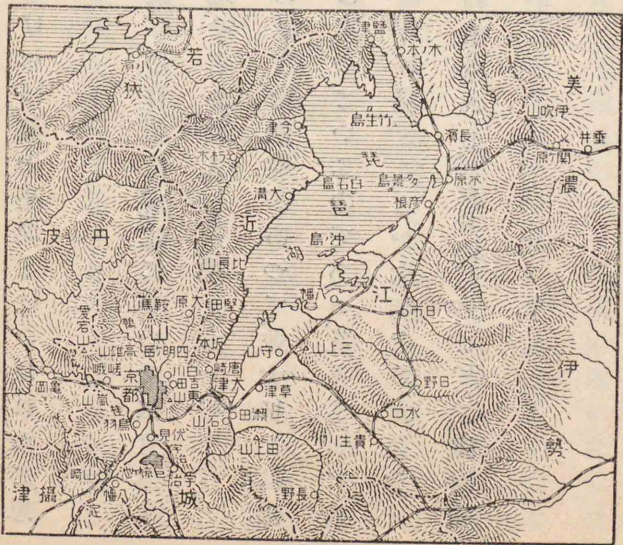
蕭颯 さびしくふる風の形容。

二 比叡山上の眺望

杉村廣太郎

往年の秋、比叡山に登りて、其の大學寮に宿す。時に夜氣漸く寒うして、夢まごかなること能はず。拂曉起つて窓を開けば、夜來の密雲いつしか全く晴れて、殘月淡く天空に在り。東谿の老杉、皆月を浴びて、光水の如し。秋風の蕭颯たるを聞きつゝ、坐して天の明くるを待つ。月益々淡く、東漸く白し。

昨日、杉と杉との間、雲霧深く罩めたるもの、今朝明け來れば、彼方に村落を現し、此方に田圃を生じ、忽ちにして森出で、忽ちにして丘來り、近くは堅田の里、遠くは



爽涼 晴々と氣持がよい。

指顧の間 指し示したり、又ふりむいたりして見ることのできる程の近い所。

峨々 山のけはしい形容。

隈々 指點す。すまみ。

指點 それと定めて指し示すこと。

轉手 琵琶の首の糸を巻いた細い所。

三上の山、刻一刻其の藏むる所を顯し來る。やがて旭光輝々、ある限りの山河、大地、盡く其の姿を現じ了れば、こゝに其の村や、川や、森や、丘を左にし、右にし、前にし、後にして、二大湖水の其の中に出現し來るを観る。壯觀いふべからず。

朝餐を終へて大學寮を出づ。湖光爽涼、沖島、多景島、竹生島を數ふべく、堅田、唐崎は指顧の間に在り。漸く行いて道を雲母阪に取り、比叡の絶頂四明が嶽に登る。雲母阪より登るに一巨木を見ず。更に進めば、矮小なる灌木も無く、到る所唯小篠の生ひ繁れるを見るのみ。峨々たる峻阪を攀ちて、遂に最高峯に達す。此の邊より京都を下瞰するに、市街の隈々まで指點することを得。眸を北に轉すれば、小比叡を隔て、遙に大原の里、山谷の間に潜めるを見る。

凡そ四明の勝は、近江、山城二州に跨がり、超然として群山を抜き、東の方琵琶湖の大湖と、西の方京、攝の平野とを一眸に集め得べき所に在り。水を見れば、琵琶湖の胴腹は、堅田、唐崎に至り、狭まりて轉手となり、更に瀬田、石山の邊より瀬田川となりて、一たび連山の間に隠れ、潜み流ること幾里にして、更に遙なる後方の山麓より宇治川となりて流れ行く。而して賀茂、桂の二川は東西より洛中

二 比叡山上の眺望

蜿蜒
うね／＼。

重疊
かさなりあ

峽
ふ。

山と山との

間。

陵夷

次第に低くな

ること。陵は

をか、夷はた

ひら。

長嘯

ながくうそぶ

くこと。

江城河攝

近江、山城、

河内、攝津。

を抱きて流れ、末遂に宇治川に合して淀川となり、白蛇の蜿蜒として走るが如く、平野の間を縫ひて、遙に攝津に下り行く。山を見れば、湖邊の峻峯比良山より沿ひて、連山重疊、山城に入り、又小比叡より大原の里を経て鞍馬、高尾となり、高きは愛宕の山、低きは嵯峨の峽、其の末漸く陵夷して、西山一帯は河攝二州の方に消行く。而して湖畔に於ては、堅田、阪本、唐崎、大津など手に取る如く、瀬田の長橋に汽車の煙を揚げて走るを見、山西に於ては、白川、吉田、上京、下京、鳥羽、伏見、巨椋池など、淡靄中に旭光にきらめき渡るを見る。山を繞りて宛然たる一大バノラマなり。恍として自ら覺えず、起つて長嘯すれば、聲は脚底の白雲を越えて、遠く江城河攝の野に傳はる。

三 兎 狩

徳 富 蘆 花

収穫が済む。霜が降る。裏山の楓が染まる。すると兎狩の季節がそろ／＼始る。つくろひに遣つてあつた網も出來て來る。何日は兎狩といふ貼札が出る。脚絆、

草鞋の用意に忙しくて、僕等は何も手に着かない。愈、其の日になつた。炊事番は夜半に起きて、握飯を拵へる。皆支度して塾の庭に勢揃する頃は、午前三時過でもあらう。月が白く冴えて居る。三たび関の聲を揚げて、月影を踏んで出かける。大人組は網をかついで、高らかに詩を吟じて行く。僕等は黙つて、併し心は得々としてついで行く。

ねむさうな雞の聲のする村も過ぎ、けたく、ましく犬の吠えかゝる村も過ぎ、野路を通り、谷川を越え、もう一里半も來たらう。月が落ちて、野は一面の曉闇前に行く者の姿もはつきりとは見えぬ。ふとすばらしい大きな眞黒なものが鼻の先に現れる。山だ、目的の山だ。まだ早い。皆焚火をしながら天明を待つて居る。僕は藁の上に寝ころんで居ると、背は寒いが、顔や腹は焚火に暖つて、炎々と立昇る焰の間に、ちら／＼見えて居た一同の赤い顔が次第に遠くなつて、ついうつとりと一寐入したと思へば、起される。眼を摩つて起上ると、なるほど天明だ。東が白んで曉の風が、切る様に面を吹く。焚火の跡だけ黒い圓を描いて、四邊は一面の霜だ。やがて勢揃して山にかゝる。進軍の號令がかゝる。関の聲が一時

天明
夜あけ。

天明
夜あけ。

勢子
鳥獸を追ひ出
す。

に揚る。二山も追ふ頃は、もう朝日が見々と秋の空に昇つて居る。
今懐うても愉快だ。秋が黄に、紅に、紫に、蒼に、あらゆる彩色の限りを盡した木
を押分け、葉を打拂ひ、聲をあげて登る心地。網近くまで追ひつめて、如何かと思
つて居るとき、何處からか、とれたといふ聲がして、吾知らず棒を振つて勝鬨を
あげる心地。網番をして、攻寄せる勢子の叫の間近になるのに、兎のうの字も駈
けて來ず、あゝだめと落膽するとき、突然がさ〜と音をさせて、覗く鼻先へ飛
込んで、二つ三つ網ながらにどんぼがへる兎を、樹蔭から飛びかゝつて押へる
心地。落葉かき分けて、谷川の水を口づけに飲んで、木の根、草の上に脚投出して、
握飯にかぶりつく心地。食つてしまつて、落葉の床に仰向に寝て、碧玉よりも澄
んだ空を眺めて、汗ばんだ顔を冷々した風に吹かせる心地。數へ立てると、際限
も無い。

秋の日の短さ、まだ三匹しか取れぬに、もう鴉が鳴き出した。遙に見える湖や
川は金の如く夕日に閃いて居る。獲物は葛藟で四脚を縛つて、大人組が昇いで
とくに還つた。僕等は紅葉の枝を折つて、ぶら〜後から還つて行く。山を下り

(一)名は忠教、徳
川氏初世の忠
直な武士。將
軍の前で鶴はつ
吸物を賜はつ
た時、餘り菜
が多、肉が少
かつたので、
翌日多くの青
菜を献上して
鶴を献上する
と諷刺した。

Greece

て野に出ると、日は彼方の森に沈んで、夕煙が村々に立昇る。と思ふと、薄紫に煙
る野末に大きな月が顔を出す。其の月がやゝ高く、やゝ小さくなつて、打連れて
歩み行く。影の大分短くなる頃には、僕等はもう塾に歸り着いた。草鞋をぬいで、
顔を洗つて、先生始め一同大胡坐で、てんでに兎汁を盛つて飯を食ふ。大久保彦
左の鶴の吸物ではないが、此の兎は別名を大根、胡蘿蔔、牛蒡、燒豆腐、蒟蒻といふ
のではあるまいかと思ふ程、正味は少い。併し其の味、否それ、も食つてしま
つて、着物も更へず、ぐつすり寐る時の心地は、何ともいへない。夢も見ない、身う
ごきもしない。翌朝の九時頃までは死骸も同然だ。

— 思出の記 —

四 スバルタ武士

昔希臘にスバルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇の譽
今尙高し。而してスバルタ人の教育の方法と生活の状態とを聞くものは、此の
聲譽の偶然にあらざるを知るべし。

スバルタ人は、悉く武士にして、男子生れて七歳に達すれば、國立の教育所に

収容せられ、王子、王族といへども家庭に人と成るを許されず。其の教育は身體の鍊磨と士氣の養成とを主とし、日常の學科は體操、武術、劍舞、軍樂等にして、讀み書きの如きは、餘力を以て之を學ぶに過ぎず。

教育所に於ける少年、青年の生活は専ら廉潔、質素、克己、忍耐の氣象を鍛鍊するを目的とし、其の規律は頗る嚴格なるものなりき。寝ぬる時は、僅かに一枚の敷蒲團を用ふるのみ。其の蒲團は河邊の蒲の穂を集めて、自ら之を作らざるべからず。衣服は重着を許さず。冬も尙はだしにて、靴を穿つを得ず。毎日河水に浴して、温湯を用ふることなく、食物も亦極めて粗惡にして、飽食することを許されず。是他日戰場に出でて、飢渴に耐ふるの習性を養はんが爲なり。

言語は簡明を貴び、饒舌を誡む。故に今日に於ても西洋諸國にては、言語の簡單明白なるをスバルタ人の答といへり。又謙讓と從順とはスバルタ武士の最も重んずる所にして、長幼の序正しく、未成年者は路を行くにも、両手をマントの下に入れ、視線を地上に垂るゝを禮とし、揚々濶歩するを得ず。公民は總べて未成年者を懲戒するの權利を有し、懲戒を受けたる未成年者若し之を其の父

饒舌
おしやべり。

濶歩
大またにある

公民
市の政務に參與する資格のある市民。

死を見る云々
死を樂しむこと家にかへるが如しといふ意。韓非子に「三軍既成陣、使士視死若歸。」
祖國
自分の先祖以來屬して居る國。

兄に告ぐる時は、父兄は更に之を懲戒するの義務あり。

二十歳に達すれば、始めて共同の教育所を出でて公民の列に入る。而も武藝の練習は終生之を怠るべからず。公式、祭儀の席には老若相合して武勇の歌を誦す。老人先づ聲を上げて、我等は嘗て武勇なる壯者なりき。と歌へば、壯年之に次ぎて、我等こそ今はそれなれ。知らぬものはいざ試みよ。と歌ふ。少年亦之に和して、我等はやがて更に武勇なる壯者たるべし。と結ぶ。

かくの如き尙武教育に鍛はれたるスバルタ武士は、死を見ること歸するが如く、瓦となりて全からんよりも玉となりて碎けんことを希ひ、祖國の爲に一命を捨つるを以て無上の名譽とせり。

こゝにスバルタ武士の面目の一端を見るに足るべき二三の美談を記さん。敵の軍勢山野に満ち、大小の軍旗空をおほひて天日暗しとの報に接し、大將自若として曰く、然らば其の蔭に戦はん。

敵勢雲霞の如く、其の數を知らずと言へば、一將喜んで曰く、敵勢大なれば、我等の名譽も亦随つて大なり。一將亦曰く、我等は敵軍の數を知るの要なし。唯其

叱す
しかる。

之に乗りて歸
れ
死骸となつて
もどれ。

我が子は云々
我は我が子を
祖國の爲に産
んだ、即ち我
が子は祖國の
役に立つた。

の所在を知るべきのみ。
敵軍將によせ來らんとすと報するものあり。將軍叱して曰く、敵、我に寄するに非ず。我、敵に寄するなり。」

スバルタ人の忠勇義烈なるは獨り男子のみに非ず、女子も亦此の美德を分てり。一婦人其の子の出陣に際し、自ら盾を取りて之に授けて曰く、勝ちて持歸れ。然らすんば之に乗りて歸れ。」

或時の戦に一時に五子を失ひたる母あり。人あり來りて之を告ぐれば、先づ勝敗の如何を問ふ。我が軍勝てりと聞きて、喜んで曰く、我が子は祖國の爲に之を産めり。」

又或時の戦に、討死したる勇士の母は、花冠を被りて街頭に集り、互に其の子の名譽を祝し、敵の包圍に陥りたる將卒の母は、固く戸を閉ぢて出でず、私に其の子の武運拙くして、祖國の爲に死する能はざるを悲しめり。—國定高等讀本—

五 勇士の行く手

幸田露伴

命をふくみて 勇士出で、

馬をうたする 朝まだき、

胡天三月 春寒くして、

風に骨あり、雪に聲あり。

小手をかざして 見やる彼方に、

白雲籠むる 空は小暗く、

笠踏みしめ だくを追ふ路、

鐵蹄すべる 氷危し。

さもあらばあれ、さもあらばあれ、

人に意氣あり、馬に驛あり。

風たゞみだす、馬のたてがみ、

雪たゞくるふ、人の眼の前、

命をふくみて 馬をうたする

勇士の行く手 風雪も無し。

うつ
馬にのつてゆ
く。
胡天
夷狄の國の氣
候。

だくを追ふ
急な歩調で馬
を走らせる。

驛
あららま。

五 勇士の行く手

(一)明治三十七年五月一日陸軍大將黒木爲楨の率ゐる第一軍(近衛第二師團)は鴨綠江を渡りて九連城を陥れ、朝鮮の國境を突破して露軍を追ひつめた。施條銃の内部に螺紋を卷いた一種の小銃。銃把の柄。藥盒。銃の火薬をつめる所。鹵獲。分捕。(二)現任陸軍中將藤井茂太。當時黒木大將の下に第一軍參謀長であつた。Mahogany。印度南米等に産する樹。伐りて日光にさらせば黒色に變ずる。

六 其の夜の黒木本營

司令部の光景は、まるで戦争同様であつた。司令部といふのは、後に廣庭の支那風の大きな家の中にあつた。此處で始めて私の目に入つたのは、銃劔をつけた儘壁にもたせかけた露國の施條銃の大きな一束であつた。見ると、一つとして血痕の附かないのはない。中には彈丸の中つた所から裂けたものもある。又中に一つ銃把に銃丸を受けて、中つた所は小さい穴に過ぎぬが、之が藥盒に通つて破裂した爲銃の持主に手ひどい傷を負はせたと見えて、銃把にありあり其の證據を留めて居るものもある。其の又傍には鹵獲した大砲の彈丸を山の如く積んである。何でも今度の戦争で、露軍は砲二十門を失つたといふことだ。かういふ物を見て居る中に、參謀長藤井少將から、黒木大將が例の廣庭の所で、外國記者一同にお目に見えらうといふ通知があつた。我々の黒木大將に面會したのは之が初めて、藤井參謀長は順々に一人々々我々を紹介してくれた。やがて私の順番となつた。見れば、大將は中背の人で、色はマホガニーと紛ふ程

Roberts。英國の老將軍。南阿戰爭の總司令官として馳名を走せた人。(西曆一八三二—一九一三)

莞爾につこり。

日禮日つきであいと。さつするこ

に黒くなつて居る。短い口髭が上唇を覆ひ、其の下に嚴格に結んだ口、堅くひき緊つた顎が見える。眼の色は黒いが、それにロバーツ元帥の眼の様な愛嬌があつて、顔の下の方の、殊にむづかしげなのを差引して居る。何だか、一種力のある立派な顔で、如何にも鴨綠江に架橋して、歐洲最良の兵が固守した地點に、日本の精兵を送るを畏れぬ人のやうに見えた。將軍はだぶ／＼した紺色の軍服を着け、端細になつた帽子を被り、足には上草履を穿いて居た。今日は終日乗馬で、餘程疲れて居たらうが、莞爾として、如何にも御機嫌の體であつた。私が引合せられた時、將軍は今まで長い間、外國通信記者に會はれなかつたのを残念に思ふ事、併しそれは忙しくて已むを得なかつた爲で、いつか其の中機會があるだらうと待つて居られた事など話された。私がデーリー・テレグラフを代表して、將軍の大勝利のために祝辭を呈した時、將軍は欣々然と微笑を含んで、手を擧げて目禮せられた。それから暫時は、一同此處に居残つて、談話が始つたが、中には將軍を相手に語つて居るものもある。藤井參謀長を捉へて、頻りに此の日の戦況を聞いて居るものもあつた。

六 其の夜の黒木本營

幕僚
參謀將校。

(1) Detaille.
佛國の有名な
戰爭畫家。西
曆一八四八—
一九一〇

(2) Cossaks.
露國の諸國境
やシベリヤに
散在する勇悍
な人民。騎兵
は殊に武勇の
名が響いてゐ
る。

其の中日は全く暮れて、篝火が此の廣庭に焚始められた。一方の火の傍には、大將と幾人かの幕僚其の中には久邇宮殿下もいらせられたが坐つて居る。一方の火には、外國通信記者が忙しげに何か書いて居る。其の外には士官や兵卒がかたまつて居る。さながらこれドタイユの戰畫其のまゝである。火の側には、煙草を吹かす一團、あちらこちらと往交ふ武官の姿、焚火の光にきら／＼と輝く分捕銃器、壁や天井に映るをかしい様々の影、此等は實に永く忘るべからざる光景であつた。それに加へて、今まで我々の見た實戰の様を思ひ浮べなごして居ると、此の時恰も此の忘るべからざる光景に、更に一段の光彩を添へる事が起つて來た。といふのは外でもない、捕虜や負傷兵の追々到着し始めたことである。捕虜が到着すると、幕僚中の露語を解する者が、之に向つて訊問をするのである。第一番に私の見たのはユサククの喇叭卒であつた。快活な、ふざけ好きさうな奴で、こんな身の上で居ても、何だか人をばかにしたやうな眼付をして居る。何か話しかけると、氣をつけの姿で、嚴格に敬禮するが、一向落着き拂つて、なか／＼一筋繩には行きさうにない。かういふ者を訊問して、何か報知を得

ようとするのは、餘程上手に尋ねなくては行くまいと思はれたが、果して參謀連もさう思つたと見えて、間もなく外へ送り出してしまつた。

苦力
支那人の人
足。

次に來た奴は大分様子が違ふ。これは騎兵の下士だつたが、かはいさうに頭にひどい傷を蒙り、脇腹に銃丸を受けて居た。之を載せて來た擔架は、ちやうど私の居つた火の側へ、支那の苦力がおろした。何だか獨逸語でぶつ／＼獨語を言つて居る所を見ると、何でも獨逸の國境に近い地方から來た者に相違ないと思つた。恭しく手眞似で十字を書いて、如何にも心底から出たやうな聲で、我が父よ。と言つて祈つて居たが、其の啜泣するやうに吐く息が、手負の身に如何にも苦しさうで、私は不便で堪らなかつた。所が手負は何と思つたか、急に「隊長殿」と呼ばはつた。荻野大佐が此處へ來て、親切に露西亞語で之を勞つてやる。手負はさながら怪我した子供が母親の膝にかじりつくやうに、大佐の手を握つて、悲しさうな口調で私の側に居て下さい。と繰返し／＼言つた。荻野大佐は極靜に其の握られた手を放したが、手負はちよつとの間黙つて、今度は故郷に残した人々を思ひ出したと見えて、「オヤ／＼お前はどこから此處に來たの。」と

黙禱
だまつて
ること

いふ。さうかと思ふと、今度は「水、水」と叫んだ。私は幸ひ水といふ日本語を知つて居たから、其の由を番兵に話してやると、間もなく水を持つて来てくれた。私は出来るだけ徐に手負を抱起して、之を支へて居る間に、右の番兵は水を露兵の唇にあてがつてやつた。手負は長く、深く一口に水を飲んだから、私は再び之を横に寝させたが、見れば靜に黙禱するものと見えて、唇が動いて居つた。

—倫敦「テリリー・テレグラフ」從軍記者マックフェーリスの記事による—

七 君が代の歌

日本の國歌は君が代である。三十一文字の短歌、これ程短い國歌はごこの國にも無い。形の短いばかりで無く、「君が代の長久」といふ御祝詞を述べただけで、其の内容も誠に單純である。併し此の單簡、此の單純が、諸外國とは全く異なつてゐる。我が國體と國民性を十分に説明してゐるのである。

日本國の皇室は開闢以來の皇室である。此の日本の國土は我が皇室の君臨まします所と、神代の昔から定まつてあつて、皇室と國土とは決して離れない

のである。外國の皇室にはさういふ例は一つも無い。もと普通の人民の中から、或は徳望により、或は權力により次第に成上つて、王となり帝となつたのであるから、皆歴史よりはずつと新しい皇室である。國土は其のまゝで、皇室は幾度も變つたのである。それ故人民の考にも、國土と皇室とを一つにして考へる事は出来ない。皇室即ち國家とは考へないのである。

かういふ譯ゆる、外國の國歌では、どうしても國土や國家の事を歌はなければ満足が出来ない。皇室の御繁榮を歌つただけでは物足らないのである。日本では皇室の御繁榮は即ち國家の繁榮であるから、皇室の御繁榮を歌ふだけで十分である。短い君が代の歌は、皇室の御繁榮を歌ふと同時に、國家の繁榮は勿論含まれてゐるのである。

君が代の歌にあらはれた思想、天皇の御代の長久を祈るといふことは、日本の上代から種々の文學にも現れて居り、祭禮や風俗にも交つて居ること、事新しくいふまでもない。皇室の方でも人民を御いつくしみになつて、皇室と人民との間に争の起つたといふ事は昔から絶えて無い。皇室の御繁榮は即ち人

絶えて無い
全く無い。

七 君が代の歌

民の繁榮幸福であるといふことが、日本人の信念である。それ故、別段に人民の自由や幸福を歌ふ必要はない。短い君が代の歌には、國家の繁榮と共に、人民の繁榮幸福も自ら含まれて歌はれて居るのである。

改訂帝國讀本卷二終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。)

乃	函	凡	凡	滅	涼	準	况	况	冒	口	兔	免	佞	仍	兩	通用正		
刃	函	凡	滅	涼	準	况	况	決	冒	圓	兔	免	佞	仍	兩	通用正		
回	噴	噐	唇	叙	収	双	厥	厥	厨	即	卑	勺	効	劔	剪	通用正		
回	噴	噐	唇	叙	収	雙	廢	廚	卽	卑	勺	効	劔	劔	剪	通用正		
懺	懃	恒	往	廻	廩	并	帽	尅	寶	寇	冤	墻	塚	場	場	通用正		
懺	懃	恆	往	迴	廩	并	帽	剋	寶	寇	冤	牆	冢	場	場	通用正		
桿	朽	史	晋	昂	既	整	携	捏	插	拔	拿	拘	戲	戲	載	通用正		
杆	朽	史	晋	昂	既	整	攜	捏	插	拔	拏	拘	戲	戲	載	通用正		
猷	猫	猪	猿	熔	焰	潛	潤	涅	氷	毒	殺	殲	欸	楛	楛	通用正		
猷	貓	豬	猿	鎔	焰	潛	潤	涅	冰	毒	殺	殲	欸	楛	楛	通用正		
穎	稟	碍	砲	盜	蓋	盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	獵	獵	通用正		
穎	稟	礙	砲	盜	蓋	杯	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	玄	獵	獵	通用正		
劬	俟	京	亡	並	萬			織	紀	穀	粘	籤	纂	豎	竊	秘	頤	通用正
倣	埃	京	亾	並	萬			織	紀	穀	黏	籤	纂	豎	竊	祕	頤	通用正
廝	廁	勅	冲	富	冊	同	膝	腸	豚	胆	聒	耻	羹	群	罰	經	經	通用正
廝	廁	敕	冲	富	冊	字	膝	腸	豚	膽	聒	恥	羹	羣	罰	經	經	通用正
妍	妊	野	坂	囁	叶	表	衛	蛭	萌	莽	艷	館	鋪	阜	致	臥	臥	通用正
妍	妊	埜	阪	囁	協	(もよぶにて)	衛	蛭	萌	莽	艷	館	鋪	阜	致	臥	臥	通用正
峯	峩	岳	婚	娉	姊		豹	象	讎	讎	記	解	覽	霸	褒	裡	裡	通用正
峰	峨	嶽	婚	聘	姊		豹	象	讎	讎	記	解	覽	霸	褒	裏	裏	通用正
微	強	弊	弊	庵	鳴		鎖	鐵	針	釜	隣	輒	軟	贗	贊	賓	賓	通用正
微	彊	弊	弊	菴	島		鎖	鐵	針	釜	鄰	輒	軟	贗	贊	賓	賓	通用正
村	普	考	慙	慙	忘		鶴	鬱	鬪	麵	馱	隸	隙	隔	陌	間	間	通用正
邨	普	攷	慙	慙	恣		鶴	鬱	鬪	麪	馱	隸	隙	隔	陌	閒	閒	通用正

附録

* 卻シヨク

ロマ、隙。
「退却」

鍛カダシ

キタノ、「鍛錬」
シコロ、鍛。

宛 字

(左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし

覺束なし

かひ(詮の意
の場合)

甲斐

きつと

屹度

さすが

流石、道

しまふ

仕舞ふ

だけ

丈

だめ

駄目

ちやうど

丁度

ちよつと

一寸、鳥渡

でたらめ

出鱈目

附 録 終

とうく	到頭
とかく	兎角、左右
とて、とても	迎
とにかく	兎に角
なか／＼	中々、却々
ふるまひ	振舞
はかなし	果敢なし
ほんたう	本當
むだ	無駄
むづかし	六ヶし
やたら	矢鱈
やはり	矢張

大正六年十一月五日
大正七年二月八日
大正七年五月二日
大正七年十月五日
大正七年十二月十三日

大正六年十一月五日 印刷
大正七年二月八日 印刷
大正七年五月二日 印刷
大正七年十月五日 印刷
大正七年十二月十三日 印刷

訂正再版發行
訂正再版發行
訂正再版發行
訂正再版發行
訂正再版發行

著 者 芳 賀 矢 一

東京市神田區裏神保町九番地

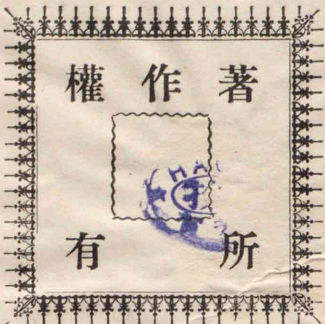
印 刷 者 兼 合 資 會 社 富 山 房

合資會社富山房社長

代 表 者 坂 本 嘉 治 馬

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

印 刷 所 合 資 會 社 電 新 堂



發 行 所

東京市神田區
裏神保町九番地

合 資 會 社 富 山 房

長電話本局一〇三六・本局四一三〇番
振替 口座 東京 〇五一番

改訂帝國讀本

定 價	
卷一、二各金參拾八錢	卷三、四各金參拾六錢
至白卷十五各金參拾錢	

